
サークルの大学生と

M@A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サークルの大学生と

【Nコード】

N9787F

【作者名】

M@A

【あらすじ】

サークルで知り合った大学生との話。

壱

1

俺がまだ、大学生の頃。
ちょうど、

大学生活も中盤を過ぎて後半を迎えた時期だった。

三年からの就職活動で幾つかの内定を得ていた俺は、
ひとまず、卒業後の進路が固まってきたので安堵すると共に、
頭の中にある残りの懸念材料を片付けにかかっていた。
と、言っても卒業する為の単位を取得する事と、

内定を得た中から就職先を決定する事、

くらいなので他の学生達と何も変わらない悩みだった。

この内、就職先については、

第二希望と第三希望から内定を貰っていたので、

そのどちらかになるだろうな、というのをぼんやりと頭に描いていた。

卒業に関しても、

取得しなければいけない単位は無理のある量ではなかったため、
殆ど悩みなんてない、というのが実情だったかもしれない。

よほどの予測不能な事態が起こらない限り、

自分の前途は洋々に見えた。

四年の春になると、見通しは更に確かになってきて、

あとは卒論と単位に集中していればよい、という状態になった。

その頃になると、

自分の生活に物足りなさを感じてくるようになってきて、

まるで入りたての一年生のように何か面白い事はないだろうか、

と自分の周りを嗅ぎ回るようになっていた。

構内掲示板や学食で周囲の人間がしている会話の中から興味を惹くような話題がないかと

アンテナを張っているみたいな状態だった。

しかし、俺の希望を満たすようなものは、なかなか見付からない。何か新しい事を始めるにしても一年もしない内に卒業だし、

仕事に備えなくてはいけない用事なども発生してくるだろう。

新人生ではないのだ。

腰を据えて何かに取り組むような事は出来ないし、

同級生の進路先は様々だから

クラスで何かをするというのも無理があった。

その時になって俺は、

思った以上に自分が不自由な状態であるのを知った。

しかし、あまり落胆はしていない。

元々、興味のある事を探す、と言っても、

そんなに簡単に見付かる、と期待していた訳ではなかったものだから、

半ば諦め半分の気持ちで毎日を過ごしていた。

大学に行って、週三回バイトをして……

という毎日は退屈ではあったが平和な日々だった。

そうして、ちょうど春が終わり、梅雨が来ようか、という頃。

興味深い話を聞いた。

俺の所属する学科は文系で、比較的、少人数で構成されているのだが、

その内の一人が、あるサークルについての話をしていた。

そのサークルの主な活動は、

俺達の大学と近隣の大学で合同の飲み会を開催している、
というものらしい。

要するに合コンなのだが、

その言葉から連想させられるものとは雰囲気が全く違い、恋愛色は薄く、酒を飲みながら研究関係の話なんかをするのが主な目的なんだそうだ。

そんな話は初耳だったので、俺は、その話を更に詳しく訊いてみた。すると、その会合は、便宜上「サークル」と呼んでいるが、会員なんてものはなく、かなり自由な集まりである事がわかった。そもそもそのきっかけは、

俺の大学にいる男と他校にいる女が付き合っていて、彼等が主催者となって何度か合コンを開催していたが、次第にカップルが誕生しては抜けて行き、メンバーを入れ替えながら現在は恋愛志向のない者達が残った集まりだ、という事だった。これは、面白い、と思った。

更に詳しく訊いていくと、基本的に参加は自由な事。ただし、社会人や全く大学に関係のない人はNG。

それから参加費として、

一人分の飲み代程度の会費を徴収される、という事。

それ以外に、特別な決まりはない。

会費さえ払えば、途中参加、解散でも構わないらしかった。

つまり、参加者の会費が当日の飲み代になるみたいだ。

俺は、その話をしてくれた友人に、

次は、いつ飲み会が開催されるのか、という事と自分も参加をしたい、

という話をした。

日程については、はっきりとは決まっていなかったらしい。

「おそらく次の金曜だろう」と友人は言った。

参加はしたいが、日程がわからないのでは困る。

それに、勝手がわからないのも不便だ、と思った。

すると、友人は、

「じゃあ、次回は俺も参加するから一緒に行こう」と言ってくれた。俺は、礼を言ってお催いが確定するまで連絡を待つ事にした。

それから、数日後。

友人から連絡が来た。

次回の開催は、やはり二日後の金曜に決まったようだ。

俺は参加の返事と礼を言って当日の打ち合わせをした。

そして金曜夕方。

講義が終わり、

友人と少し時間を潰してから待ち合わせ場所の駅前へ向かう。

暫く待っていると、予定されていたメンバーが揃ったようなので、居酒屋みたいな店に移動する。

参加者は俺達を除いて十人ほど。

最初に俺は、簡単に紹介されて名前と学部、学年を言った。

その夜は、とても刺激的な夜だった。

何人かと話をする、初めて会った人達だったが、

どの人とも自分と共通する話題があるのがわかる。

違う大学の人間もいたが、研究内容が似ている人達が多かった。

後から知ってわかった事だが、

友人が話した参加条件に俺が聞かされていない事が一つだけあった。

それは、俺の大学からは、どの学部からでも参加出来るが、

他大学からの参加は特定の学部からしか認めていない、という事だった。

これは、複数の大学を跨いでの集まりで

参加者同士が馴染み易くする為のある種の方策だったみたいだ。

自分の大学なら多少学部が違ってても話が合うだろうが、

他の大学となると、なかなかそうもいかない事が多い。

その為、他校の参加者は、

文系のある方面を専攻している人間だけが参加出来る事になっていた。

と、言っても著しく狭い範囲ではないから狭い門でもない。

俺の大学からの参加者に対して門が広いのは、元々、

このサークルを始めた人間と現在の主催者が俺の通う大学だった、という理由が大きいだろう。

だから、俺と同じ大学ではない人間は、

俺と専攻内容が似ている可能性が高かった。

友人は、俺が、その条件を満たしていて、

尚且つ条件を満たさなくなるような恐れがないので説明を省いたのだろう、と思われる。

どちらにしても俺が参加するのに不都合はないし、聞いても聞かなくても困らない条件ではあった。

しかし、その規制の御蔭で、

俺が初対面の人達に苦もなく解け込めたのも事実だった。

結局、その日は、

研究上の議論と卒業後の話などの雑談をして時間が過ぎていった。帰り道は、上機嫌だった。

議論がこんなに楽しかったのは、いつ以来だろう？

中学校の時、プロ野球の両リーグベストナインを

友人と決めようとした時以来かもしれない。

そんな懐かしさが湧いてきた。

参加者は、初めて会った人達だったが、

皆それぞれ何年か学んできた中で得た持論があるので

自然と話が盛り上がりやすい。

講義で得た知識、自分で学んできた理論などを御互いが戦わせるのだ。

そう言うのと、どこか物騒なイメージがあるが、

誰かが誰かを打ち負かせる為の議論じゃないから、

御互いを尊重しつつ進んでいく話し合いが新鮮で気持ち良かった。

その二日後。

誘ってくれた友人が飲み会の感想を訊いてきたので、

楽しかった事と、また参加したい事を話した。

友人は喜んでくれて、一度参加したなら、

もう一人で行きたい時に行って構わないと教えてくれた。

俺は、開催日はどうやって知るのかと訊くと、

主催者にアドレスを訊けばいいらしい。

そうすれば、向こうからメールで知らせてくれるようだ。

友人は、最後に、こう言った。

「とりあえず次回の日程が決まったら俺が教えるから、

そこで参加して、後は自分でアドレスとか訊きなよ」

俺は礼を言って連絡を待った。

それから数日後。

友人からメールが届き、

そこには次回のサークルの待ち合わせ時間と場所が書いてあった。

それから今回、自分は参加出来ないが楽しんできてくれ、

という意味の言葉があった。

時間や場所は前回と同じだったから迷わないだろう。

曜日は、やはり金曜日だった。

そして当日、駅前。

待ち合わせ場所に着くと、

前回、知り合った顔を見かけたので、挨拶をしたりした。

全員が揃ったようなので、店に向かう。

今回の参加者は二十人程度。

前に見かけた顔は半分くらいか。

人数が増えている分、賑やかで、同じ店に入っただが、

今回は大きなテーブル席に案内された。

乾杯が終わると、雑談から次第に前回のような盛り上がり、

前回知り合った人が話を振ってくれたりしたので、

俺も積極的に話し合いに加われた。

この辺の流れは図ったように同じだった。
違いと言えば、微妙に参加者が異なるくらいだ。

その中で一人、気になった女がいた。

前は友人がいたせいで様子見というか

友人の陰に隠れていたような形だったせいもあるけど、

参加者全員にまで意識がいかなかった。

今回は一人だったせいで自然と色んな人へ視線がいったので、

前回よりも参加者の顔を知る事が出来た。

飲み会の席なんて決まってるように見えて、

決まってるようなものだったから、

適当に周りの人間が変わっていくけど、

始まって一時間くらい経った頃、その子は俺の隣に座って声をかけ
てきた。

「見ない顔だけど、初めて？」

「はい。前回からです」

俺も、その子に見覚えがなかった。

おそらく前は来ていなかったのだろう。

全体的に目立つ容姿だった。

髪は緩いウェーブがかかっていて茶色い。

若干、吊目というか猫目で、

頬には張りがあって健康的な雰囲気でした。

酔っていて血色が良いせいで、そう見えるのかもしれない。

肌が白いから火照っているのが、よくわかった。

「そう……。誰かの紹介？」

流し目で見られるとゾクリとする妖艶な雰囲気がある。

その瞳のせいだ。

「ええ……」

俺は友人との経緯を簡潔に話した。

すると、彼女は、あの人の友達なのか、という表情をした。

彼女とは、そこから友人に關した話題や

御互いの専攻についての話題で盛り上がる。

そんな感じで二回目の飲み会は、一回目よりも楽しく過ごせた。徐々に知り合いが増えていく手応えもある。

最後の方で主催者にアドレスを訊いた。

主催者は、俺と同じ大学の同じ学年で、違う学部の男だった。

これに参加するまでは顔も知らなかったが、人当たりのいい容貌で物腰も柔らかかった。

俺が次回も来たいと言つと、嬉しそうな表情を見せた。

三回目は、次の土曜に開催された。

もう三度目となると、俺が冷やかしてはない、

という認識をされてきたのか待ち合わせ場所でも歓迎されているような空気を感じた。

今回は十人近く。

また同じ店に入った。

どうやら、ここ以外には行かないみたいだ。

六人掛けくらいのテーブルを二つ繋げた座敷に案内される。掘り炬燵のような場所だから、

靴を脱いでも椅子に座るのと変わらないでいられた。

各自、適当に席に着く。

もう知った顔ばかりだったから、どこに座っても困らない。気を遣う事は少ないし緊張もしない。

俺は、主催者から遠い、通路に近い席を選んだ。すると、隣に女が座った。

見ると、二回目で知り合った猫目の女だ。

「また来たんだね」

そう言つて笑う。

髪を払った時に耳元でピアスが光った。

俺は曖昧に返事をする。

注文を訊かれて飲み物が届くと乾杯になった。
それから、また熱い話が展開される。

この感じが好きだ。

何とも言えない昂揚感。

俺は、これまでの二回以上に話をした。

研究関係の深い話もしたし、

時折、誰かの意見に反対するような事も言った。

自分が何を学んできたか、これからどうしていききたいか。

そんな若い衝動をぶつけあった。

隣が少し気になったが、彼女は、あまり話さない。

と言うか、話そうとしない。

その癖、席も移らない。

ただ飲んでいる事が多かった。

何となく不思議な気がした。

会の終盤では、遂に酔い潰れて寝てしまったみたいだ。

周りも、あまり気にしていない。

時折、大丈夫かと、声を掛けても反応がない。

心配になったが、

「いつもの事だから」と別の人に言われたので、そっとしておいた。

俺は、今まで二回、飲み会に参加して、

最後までいた事はなかった。

今日は、明日の予定がないのもあって、

最後まで残ってみようと来た時から決めていた。

馴染みの顔が増えたのも影響している。

それから、飲んだり話したりしながら、

一人、また一人と人数が減っていき、

大体、四時間ほどで御開きになった。

零時には、まだ一時間以上ある。

充実感と僅かな疲労。

だが、全体的に満たされた思いが支配的だった。

席を立とうとすると、隣の酔い潰れた女を二、三人で介抱している。

「大丈夫ですか？」

俺は半分義理で声を掛けた。

「うん。多分、平気。最近、多いのよねー、この子」

一人の女が言った。

「そうですか……」

気にはなったが、人がいるし心配ないだろう。

そう思っただけで帰ろうとした時、背後から呼び止められた。

「ねえ……俺さんて、家どこ？」

その声を掛けたのは、

さっきから傍にいて背中を擦ったり一番親身になって介抱していた
髪の短い女だった。

「……ですけど……」

何の事かわからなかったが、俺は家の番地を言う。

「これから……帰る所だね？」

「ええ……まあ……」

俺が、そう答えると、

介抱していた女達は一様に安堵したような表情を浮かべて言った。

「ちょっと悪いんだけどさ……」

この子を家まで連れて行きたいのよ。手伝ってくれない？」

彼女が言うには、

酔い潰れている子が起きないので家まで連れて行きたい。

しかし、この中と同じ方向の人間はいないし、

女の力では大変だから男手が欲しい。

できれば、俺に手伝ってもらえれば、助かる、という話だった。

「無理矢理、起こせませんか？」

俺は、声を掛けてきた髪の短い子に訊いた。

「ダメダメ。私達、前もそうだった時に起こそうとしたんだけど、
なかなか起きないのよ」

緩やかな眉根を寄せる。

「でも、放っておく訳にもいかないでしょ？」

だから前は三人で協力して背負って家まで送って行ったんだから」

そう言う同意を求めるように横の女を見た。

目を向けられた子は小さく何度も頷く。

俺はテーブルを見下ろした。

腕を枕にして寝ている彼女は、

聞いたように何をしても起きないような様子ではあった。

少し迷ったが、俺は結論を出す。

「それで……俺は何をすればいいんですか？」

店を出ると、夜風が気持ちいい。

夜、出歩くには向かない季節が、漸く終わりを告げたようだ。少し寄り道をして散歩でもしたい気分だった。

背中の御荷物さえなければ……。

隣で監督するみたいに並んでいる髪の短い女の指示に従って、俺は酔い潰れた女を背負っていた。

太ってはいないが、どう見ても四十キ口はあるだろう。

それを背負って歩くのは、男とは言え、楽ではない。

彼女の指示によると、このまま電車に乗って行くようだ。

隣の女は、背中の彼女の荷物を持ち、彼女の家まで案内する役目。

俺は、その子を家まで運ぶ役目。

見事な役割分担だ、と髪の短い女は自画自賛していた。

飲み会の店は、駅前にあるので数分で改札が見えてきた。

俺は、それだけで息が上がってしまった。

残っていた他の子は駅までついて来ると、

俺達に任せて笑顔で帰って行く。

そこからは、俺の自宅方向へ向かう電車に乗った。

背負われた彼女は完全に寝入っているみたいで、

電車に乗っても一向に目覚める様子がない。

「二駅目で降りるから」

と言われたので、その通りにする。

前に行く女に遅れないように、ついて行った。

背中の彼女の家は駅から歩いて五分ほどのアパート。

個人向けらしく、あまり広くなさそうな部屋が八部屋あった。

二階建ての各階に四部屋。

先に行く女は1階の奥へ進んでいく。

一番奥のドアの前でこちらを振り返った。

俺が辿り着くのを待ってから、「ここ」と目で合図する。

それから彼女が運んできた鞆の中を漁って部屋の鍵を探し出した。

（勝手に開けていいのかな……）

そんな思いが浮かんだが、こうでもしなければ

背中の彼女は帰って来られなかったのだから構わないだろう。

黙って、その様子を見ていると、すぐにドアが開いた。

開けてくれたドアの中に足を踏み入れると、

想像通り1DKくらいの広さ。

玄関を入って、すぐの場所に、ゆっくりと彼女を下ろした。

座らせるようにしたつもりだったが、

菟弱のように寝転がってしまった。

「どうでしょう？」

俺は隣の女に訊ねる。

「とりあえず、運んでくれてありがとう」

「いえ……」

「ここで寝かすのも、あれだからベッドまで運ぼうか」

「上がっていいんですか？」

「平気よ。風邪引くよりいいでしょ？」

「はあ……」

「じゃあ、そっちがベッドだから運んじやいましょうよ」

俺は再び彼女を担ぎ上げようとした時、

不意に浮かんできた疑問を口にする。

「あの……ベッドに運びますよね」

「うん」

「その後、どうするんですか？」

「そのまま俺達が帰ったら鍵も掛けられないですよ」

「あつ……そっか……」

「鍵だけ持つて行く訳にはいかないし……」

「そうねー」

「前の時つて、どうしてたんですか？」

「前は、ここまで来るのに、もつと時間がかかったから……」

「ほら、女の人だけだったし……」

「その時は、家に着く頃には起きてくれたんだよね……」

「そうですか。……で、どうします？」

「どちらに主導権があるのか、わからなくなってきた。」

「鍵だけ持つて、外に出て、」

「鍵を掛けた後にポストに入れておくか……でも、それもまずいか……」

……

「彼女は、いい方法が思いつかなくて、今後の行動を決めかねていた。」

「ここは、全部屋のポストがアパートの敷地内の、入ってすぐ横にあるって、」

「各部屋のドアに直接ついているタイプではなかった。」

「だから、今、言った作戦を採用するなら、」

「出来れば鍵は、もう少し安全な場所がいいだろう。」

「それとも、目の前の彼女に鍵を預かってもらうか……」

「しかし、それでは寝ている子が不便だろう。」

「そんな話を話し合っていたら、寝ていた彼女が急に起き上がった。」

「あれ？」

「半分閉じた目で、周囲を見回している。」

「ここ……私の……家？」

「俺達は顔を見合わせて喜んだ。」

「急いで状況を説明して彼女を起き上がらせる。」

それから、

俺達が外に出たら鍵を掛けるように言つて、二人で外に出た。すぐに言われた通り錠がかかる音がした。これで、とりあえずは大丈夫だろう。

同じ道を通つて、二人で駅まで戻つた。

もう少しで終電だったので危うい所だ、と溜息をつく。更に二駅乗つて俺の方が先に降り彼女とは別れた。帰宅すると零時を過ぎていた。

2

これまで飲み会には三度、参加してみたが、俺としては特に嫌な事もなく楽しただけが残つた、という感想だ。前回みたいな終わり方は勘弁して欲しいが、アクシデントだと思えば気にならない。

他に問題と言えば金くらいか。

これから毎週参加し続けるのは厳しいかもしれないが、貯金も多少あるしバイトもしている。

他に金の使い道もなかったし、

恋人と食事をしていと思えば痛い出費でもない。

何より、その自由な雰囲気良かった。

拘束がない。

責任も規則もない。

妙な、しがらみとか上下関係もなかった。

皆が対等に話し合えるのもいい。

あれから大学構内で声を掛けられる機会が増えた。

振り返ると、

飲み会に参加していたメンバーで簡単に挨拶を交わしたりした。

髪の短い子と酔い潰れた子は見かけなかった。

違う学部か、と思っていたが、

これだけ見ないという事は違う大学なのかもしれない。

そうしている内に、また案内メールが来た。

四度目だ。

どうやら、この会は、金曜か土曜に開催される事が多いらしい。

当時、俺は、たまに金曜にバイトが入る時があるくらいで、

金曜と土曜は殆ど空いていたから特別な用事がない時は参加出来た。これが日曜だとバイトがあつたから参加出来る機会は少なかっただろう。

このサークルは、

ちようど、ぼっかり空いた俺の隙間に綺麗に嵌まり込んで、そして静かに馴染んでいった。

きつと、相性が良かったのだろう、と思っている。

最初に誘ってくれた友人に、

「今回は行くのか？」と訊いたら、「行かない」と言われた。

どうやら別方面で気になる女がいるみたいだ。

彼は、暫く付き合えないと思う、と語った。

俺は迷ったが、結局、今回も参加する事にした。

いつものように駅前に行くと、髪の高い女を見付けた。

俺は近付いて挨拶をする。

向こうも気付いて返事をした。

俺は改めて自己紹介をする。

彼女も同じように名乗った。

やはり違う大学で、俺の通う大学からは比較的近い。

歩いていくような距離ではないが、

地理的には『御隣さん』という位置付けになるだろう。

名前はエリ。

今日はジーンズに長袖のシャツという格好だった。

肩から掛けているバッグは女の子っぽいが、
服装や髪型はボーイッシュな感じだった。
髪が短いのと顔立ちのせいで、そう見えるのかもしれない。
気さくに話しながら五分ほど、皆が揃うのを待つ。

全員が揃ったらしいので店へ移動。

今回は十五人前後の集まりだった。

エリは、自分から話しかけてくる方ではなかったけど、
近くの席だった事もあり何度か話をした。

今回は突然の依頼に戸惑っていたのもあって

冷静に彼女を捉えられなかったが、

改めて見ると顔立ちは整っているし、

控え目ないい子だ、という印象を受けた。

俺の話にも合わせてくれるので、一旦、話し始めると会話が続く。
少し、ぶっきらぼうな物言いが特徴だった。

そうして一時間ほどした頃、店に新しい客が入ってきた。

見ると、前に酔い潰れた女だった。

その女は、こつちを見てエリを見付けると手を振って近付いてくる。
そうして彼女の隣に勢いよく座る。

店員を呼び止めて、飲み物を注文した後、

二人は爆発したように話し出した。

どうやら二人は同じ大学で仲も良いらしい。

そうでなければサークルに来て、

酔い潰れた女を家まで送っていくような真似はしないだろう。

俺は置いて行かれたように黙って、その様子を眺めていた。

酔い潰れた方はアヤカという名前らしい。

皆には『アヤちゃん』と呼ばれていた。

エリと比べると外見は女らしい。

髪は長くて、巻いている感じに緩くパーマがかかっている。

まだ、それほど暑くないのに

ノースリーブにミニスカートという露出度の高い服装をしている。しかし、暫く傍で見ていると、中身はアヤカの方が男らしいのがわかった。

とにかく、よくしゃべるし、よく飲んだ。

そうして、隣で二人の様子を窺っていると、

アヤカが不意に、こつちを向いた。

「君さー、飲んでないんじゃない？」

「ええ……まあ」

「もつと飲みなよー」

「そうですね……」

「てゆーか、前も来てたよねー」

どうやら前回、俺が家まで送った事なんて覚えていないらしい。話を聞いていると、

最新の記憶が前々回にあるみたいで、彼女の言う『前』というのは、俺が二回目に参加した時の事を指しているらしい。

それを聞いて、隣のエリが彼女の腕を引っ張る。

エリは、

俺に申し訳なさそうな顔を見せて前回の経緯を彼女に説明し始めた。アヤカは、それを聞いて俺の方を向くと、頭を下げた。

「そうなんだー。なんか御面倒を御掛けして……」

あまり、すまなそうな口調ではないが、何となく憎めない。執り成すようにエリが口を挟んだ。

「そうよー、大変だったんだから。ねー」

俺は、とりあえず微笑んだ。

本当は、そんな簡単に、

サラッと流せてしまえるような苦勞ではなかったが、

当人の手前、重かったとか大変だった、とは言いつらい。

「今日は飲み過ぎちゃダメだよ」

最後にエリは、そう締めくくる。

「はいはい」

アヤカは神妙に頷いてから思い付いたように提案する。

「じゃあ、御詫びに私が一杯奢ろう。」

「……ところで、君は名前、何ていうの？」

俺はエリにしたように自己紹介をした。

「ふーん、じゃあ俺くん、何でも好きなものを頼みたまえ」

何故か上から目線の口調だ。

その様子が、どこか滑稽で、

学芸会で不慣れな女王様役をやらされてしまった

高校生みたいな言い方に思えた。

俺は、遠回しに遠慮したが、しつこく勧められて、ビールを頼んだ。
すると、彼女も同じものを頼む。

そんな風にして、

その日は、殆ど二人を相手に時間が過ぎていったが、
飲み会が終わる頃には、またしてもアヤカは酔い潰れて寝ていた。

その内、起きるだろうと待っていてても起きない。

結局、前回と同じ流れになり俺が背負って送っていく事になった。

前に、最後まで残っていて見知った女の子もいたが、

俺がいるのを確認すると、まるで当然送っていくもの、
という態度で先に帰ってしまった。

再び、俺とエリは、アヤカの家まで向かう。

一度経験しているだけに要領がわかっていたので
前ほどの苦労はなかった。

無事、送り届けられて安心する。

今日はアヤカの肩を揺すったら、すぐに起きた。
かなり不機嫌そうな表情だったが……。

二人で駅へ戻る途中、疑問に思っただけ俺はエリに訊いてみた。

「彼女、毎回こうなんですか？」

「んー、わりと最近は、こうかな」

「酒飲みなんですね」

「そうじゃないんだけどね……」

やがて駅について電車に乗り、俺達は別れた。少しだけエリとアヤカの関係が気になったけど、家に着く頃には、すっかり忘れてしまっていた。

五回目のメールが来る頃には梅雨も終盤で、

いつ明けて夏が来るのかが待ち遠しく思われた。

天気予報でも梅雨明けを予想している。

あと一ヶ月もしないで夏休みだったが、

その前にある試験が頭にあっただので

飲み会への参加を悩んだが、行く事にした。

気晴らしを兼ねて、と試験科目が少なかった、

というのを自分に対しての言い訳にする。

待ち合わせ場所に着いて店に移っても、エリもアヤカの姿も見えなかった。

少し残念な気がしたが彼女達に会うのだけが楽しみでもない。

近くに座った人達との会話を楽しんだ。

時期的に、やはり試験や卒論の話が出た。

試験科目とか論文の進捗状況とか、

そうした雑多な情報などが耳に入る。

俺は、ここが、ただの飲み会ではなくて、

こういう風に情報交換の場でもあるなら

試験前に参加しているのも無駄にはならないな、と考えていた。

そうしていると、遅れてアヤカがやってきた。

半袖のTシャツにジーンズという格好。

俺の姿を見つけると、当然のように隣の人間を押し退けて座る。

「俺くん、何、飲んでんの？あー、すいませーん。私も、これ下さーい」

通りすがりの店員を呼び止めて注文を済ませた。

彼女が来た事で、それまで話していた周りの人とは話せなくなった。

アヤカは、

殆ど俺に話しかけてくるので自然と相手をしなければいけない。結果的に二人で話しているのと変わらない風になった。

話の内容は、他の人と話しているのと、

そんなに変わりが無いが、時々エリの話も出た。

その機会に俺は訊いた。

「今日は　さん来ないんですか？」

「エリの事？」

俺は彼女の苗字を言ったので、アヤカは訊き返してきた。

「はい」

「どうだろうねー。何か言ってたっけ？」

思い出すように首を傾げている。

俺は返事を待ったが無駄だった。

話しながらも彼女の飲むペースは落ちない。

俺は、それとなく止めさせようとした。

「あのさ……」

「何？」

「あまり飲み過ぎない方がいいよ」

「何で？」

「いや……体にも良くないし……」

あまり煩く聞こえないように気をつけながら話すが効果がない。

「文句あるの？」

「そうじゃないんだけどさ」

「私が酔っても俺くんに迷惑かける訳じゃないでしょ！」

勢いよくテーブルに置いたジョッキが音を立てた。

（いや……かかってますけど。迷惑）

どうやら既に酔っているみたいだ。

こうなると、どうにもならない。

なるべく注文させないようにしてみたが、結局、飲んでしまう。

俺は、もう気にしない事にした。

同時に、

もし今日酔い潰れても絶対に送っていかないぞ、とも心に誓った。しかし、その誓いは虚しく破れた。

会も終わりに近付くと、案の定、彼女は寝てしまっていた。

御開きになると、俺は気付かない振りをして店を出ようとする。

すると、周りの人間が彼女を送っていかないのか、と言うのだ。

すっかり俺が彼女を送っていくのが当たり前という空気になっている。

放っておく訳にもいかないが、誰も自分が関わろうとしないのだらう。

最終的には、その空気に押されてしまった。

エリもないので、誰も手伝ってくれない。

一人でアヤカを背負って荷物を持って駅に向かった。

彼女の家に向かうのも、もう三度目だ。

勝手もわかってしまうのが悲しい。

何とか家に辿り着くと、一度彼女を玄関前に座らせた。

やはり起きる様子がないので、鞆から鍵を探して取り出す。

それから彼女を部屋に運び込んで玄関先に座らせた。

（さて……どうしよう）

足元で壁にもたれている彼女を見下ろす。

前回みたいに上手く起きてくれるといいが……。

呼びかけてみる。

起きない。

顔を揺すってみた。

すると、一瞬、目を開ける。

驚きつつ喜んだが、すぐに目を閉じてしまった。

それから靴を脱がせて立たせてみようとした。

靴は問題なく脱げたが、立たせるのは無理だった。

（どうしようか？）

前回、考えた事が、もう一度浮かんだ。

このまま帰ってしまうのは無用心だ。

だからと言って起きるまで待っているのも終電が近いせいで出来ない。

彼女はアルファベットのKの字みたいな体勢で横たわっている。

仕方ないからポストに鍵を入れて置くのが妥当な案だろう。

鍵の場所はメモにでも書いて置いておけばわかるはずだ。

ただ、この場所で寝かせていくと風邪を引いてしまうかもしれないし、

前に話したみたいにベッドまでは運んだ方がいいんじゃないだろうか。

部屋は、あまり広くなさそうなので、

入ってしまったえば勝手はわかるに違いない。

そう結論付けて彼女を起こそうとした。

ゆっくり近付いて、上体だけを起こすようにして両手を持った。

そうして、彼女の背中を片手で支えて、

空いた手を膝の下に入れようとする。

Tの字のように横向きに相対して、

力を入れて起こそうとした時に、彼女も起きようとしたのだろう。

俺はしゃがんだ体勢から斜め上に起こそうとして後ろに下がるようになり、

彼女は身を任せるように前傾してきた。

(あっ……)

と思った時には既に遅く、

さっき彼女が横たわっていた一メートルほど隣で

俺は彼女に押し倒されていた。

すると、彼女はそのまま押し掛かってきて、いきなり唇を合わせてきた。

「……ちよっ……おい……」

開きかけた口に彼女の柔らかい唇が蓋をする。

何か言おうとしたが、

唇を塞がれているから、鼻息とくぐもった声しか出ない。
そのままにいるしかなかった。

黙っている、

彼女は暫く身を寄せていた後、ゆっくりと唇を離していった。

薄暗い中で彼女を見上げる。

あまりよく見えなかったが、彼女の口元が緩んでいるのがわかった。
俺は問いかける。

「いつから起きてた？」

「まあまあ、そんな野暮な事は言わないの」

口の端を上げている。

笑っているのだろう。

「野暮とかじゃなくてさ、起きてるなら自分で歩いてよ」

「んー、いや起きたのは、さっきだよ」

彼女は言い訳するみたいに言った。

俺が、ここまで一人で運んで来たのを非難めいて言うと、

「だーかーらー。ちゃんと払ったじゃん」

「何を？」

「運び賃」

「……貰ってないけど」

そう言うと彼女は無言で腕を上げ、

ゆっくりと人差し指で自分の唇を叩いた。

俺は意味がわからず無言で首を傾げる。

彼女は、俺に理解されず不満そうだった。

「だーかーらー。キスよ、キス」

「キスが、何？」

「運び賃には充分でしょ？」

「いや……、俺、そんな事、望んでないけど」

「そんな事って何よ！」

「あー、ごめん、そういう意味じゃなくてさ」

「不満なら、もつとしようか？」

「結構です！」

何が楽しくて、

肉体労働の後に好きでもない女とキスしないといけないんだ。

彼女は体重を掛けて押し掛かっていたが、

上手く押し返して圧迫から逃れる。

「大丈夫そうなんで、帰りますね」

俺は、シャツの裾を直して立ち上がる。

運んできた彼女の鞆を手渡して、背中越しに声を掛けた。

「じゃあ、また」

ノブを掴んで一歩、外に出ようとした時だ。

「泊まってく？」

低く掠れた声が響いた。

その言葉を見殺しにして玄関の外に出る。

どうせ酔っ払いの戯言だ。

俺は、彼女の言葉が聞こえなかった振りをした。

「じゃあ、おやすみなさい」

振り返ってノブを掴みドアを閉める。

静かに、そして、ゆっくりと俺の視界から彼女が消えていく。

俺が完全にドアを閉めるまで、

彼女は何を言わず、じっと玄関に座って俺を見上げていた。

式

3

アヤカとのキスがあつてから、暫く俺は飲み会に参加しなかった。
『暫く』と言っても、

ほんの二、三週間程度の事であつて、
何か特別な理由があつた訳ではなく、
単にテスト期間中だった、というだけだ。

俺は、バイトも休んでテストに集中した。

結果は、まだわからないが、『不可』はないと思う。
テスト期間が終わると飲み会開催のメールが来た。

前回から今日までの間に、

二通ほど飲み会の日程を知らせるメールが届いたが、
おそらくテスト期間中のせいで参加者は少なかったのではないか、
と勝手に判断していた。

アヤカの事が頭にあつたが、間隔が空いていた事もあり、
久し振りに参加してみようかという気になった。

もう八月に入っていて、

その第一金曜日がメールに書かれていた日付だ。
予定がないのを確認してから参加の返事をする。
本当は、返事なんてしなくても良かったのだが、
不参加が続いていたので念の為という気持ちだった。

バイトと卒論の仕上げに追われて、

その日までは、あつという間に過ぎた。

金曜日に、いつもの場所に行くと馴染みの顔がいた。
何人かと簡単な挨拶をする。

暫く参加しなかった事について聞かれなかったので、

予想通り殆どの人は参加しなかったんじゃないかと思った。

元々、参加が強制ではない集まりだから、

久し振りに顔を見た人間がいても、それを詮索するような人はいない、

という理由もあるだろう。

見回したが、エリの姿もアヤカの姿も見えなかった。

今日の参加者は十人ほど。

若干、少なめ、という気がした。

皆どこか旅行にでも行っているのだろうか。

店に移動して、好き勝手に話し出す。

話題の多くは夏休みの過ごし方についてだった。

学校関係の話題だと、やはり卒論絡みになる。

飲み始めて三十分くらいしたらエリとアヤカが一緒に来た。

アヤカは俺を見付けると、隣に座って「久し振り」と言った。

俺も返事をする。

エリとも同じように挨拶して三人が囲むような形で話し出すと、

アヤカはまるで、この間の事なんかなかったかのように接してくる。

俺は、彼女達の顔を見た時から、どう対応しようか迷っていたが、

その迷いを踏み潰すような勢いだった。

その勢いと、酒の力と、周りの雰囲気と、テストが終わった解放感とで、

俺は次第に細かい事なんて考えているのが馬鹿らしい、と思えてきた。

他の参加者も同じだったのかもしれない。

その日の飲み会は少人数ながら、

なかなかの盛り上がりを見せたからだ。

夏休みやテスト後、それから進路決定。

こういったキーワードが、

その日の盛り上がりを助長していたように思う。

そんな中、何かの弾みでアヤカがこんな事を言い出した。

「俺くん、飲み比べをしようよ」

正直、俺は、食べ比べとか飲み比べみたいな

飲食での競争に、あまり興味がなかった。

最初は楽しくても終わった後には不快感が残るだけだ、
というのが経験上わかっていたからだ。

だけど、その時は、

何故か彼女の提案を受けて立とう、という気になった。

二人の目の前に同じジョッキが並べられる。

ビールの大だ。

御互い顔を見合わせ、意思確認の後、ジョッキに手を伸ばす。

ルールは、両者が同じ飲み物を頼む。

飲む速度は関係ない。

両者が飲み終わってから次の注文をする。

つまり、どちらかが飲み残しのある内は次の注文はしない。

それを続けていって、片方が飲めなくなるかギブアップするまで続ける。

という具合に決まった。

話し合って短時間で決めた即席のルールにしては上出来だと思う。

前半は御互い快調だった。

次々に注文を繰り返す。

周りは俺達に、殆ど無関心だった。

飲み比べをしているのは知っているが、

特別興味はない、という様子だ。

一気とかをする訳ではなかったし、

飲むスピードを比べる訳でもなかったので、

盛り上がりに欠けたせいかもしれない。

時々、俺達の注文の早さに横目で見える人がいた程度だ。

正に二人だけの闘い、という気がする。

エリは立会人のような態度で、マイペースに飲み物を注文した。その日は、結局、何杯飲んだだろう。

覚えていない。

ただ俺が先にギブアップしたのは覚えている。

これ以上飲むと、帰りに支障をきたしそうな気がしたからだ。

それに、負け惜しみではないが、

こんな勝負に負けても悔しくないし、何か賭けをしている訳でもない。

必死に勝たなくてはいけない気持ちは最初からなかった。

単なる余興というか御遊びの範疇を出ない。

それでもアヤカは、俺が降参すると勝ち誇った表情を見せた。

「あたしの、勝ちーちー」

エリと二人で「すごいねー」なんて持ち上げた。

すると、更に気を良くして彼女は続けて飲んでいく。

勝負が終わったんだから、

もういいだろう、と思ったが、逆に、止める理由もない。

それから一時間もすると会は終わったが、

アヤカは気付くと、いつものように寝てしまっていた。

俺は前回の反省もあるし、今回こそは見捨てていこうとしたが、

エリがいるので、そういう訳にもいかず

再び手伝わされる羽目になった。

アヤカを背負って駅まで行くのも慣れたものだ。

電車は空いていて彼女を座らせて、その両側に俺とエリが座る。

そうして、同じように家まで送り届けた。

玄関で何とか彼女を起こし、二人で駅まで戻る。

ここまで世話を掛けさせられると、急に理不尽な思いがしてくる。

何でもいいから見返りみたいなものを心が欲しているみたいだ。

何かないだろうか？

無意味な送迎を何度も繰り返させられて、

自分にとって何も収穫がないのは納得がいかなかった。
だからと言って前回のようなキスみたいなのは御免だが、
金でも取るうかと冗談交じりに言いたくなつた。

要するに、誰かに愚痴を言いたい気持ち湧いてきたのだ。
そんな思いがあつて、俺はエリに訊いてみる。

「さんつて何で、あんなに酔つ払うんですかね？」

エリもアヤカも俺と同じ学年だったが、
飲み会では新参者なので

話す時は大体、敬語か丁寧語が普通だった。

決して彼女達が先輩ではないし偉い訳でもない。

もっと馴れ馴れしくてもいいのかもしれないけど、
ただ何となく、そうした方が無難な気がしたただけだ。

それを、その時、エリに指摘された。

「俺くんさあ……、別に敬語とかじゃなくていいからね」

優しく言い聞かせるような口調の後、

フォローするように付け足した。

「まあ、私は、そういうの嫌いじゃないけどね……」

その言葉自体は嬉しかったが、

何か俺の質問をはぐらかされたような気になつて、

似たような問いを重ねて、した。

彼女は黙つて歩いていて、

その返事が来るまでに、たつぷり百歩はかかっただろう。

そうして、やつと彼女が口を開いた。

「私から聞いたつて言わないでくれる？」

よく意味がわからなかったが、

それが俺への答えになるなら、と黙つて頷いた。

「さんつて、わかるよね？」

その名前は知っている。

サークルの主催者の友人だ。

髪長い、物静かな感じの男で、

飲み会では、大体、主催者の隣で飲んでいる。

容貌は文系男子という感じで眼鏡が似合いそうだった。勿論、それは俺の勝手なイメージで眼鏡はしていない。確か、彼も四年だったはずだ。

どこの学部だか忘れたが、俺と同じ大学にいる。

話した事はないが、控えめで悪い印象は受けなかった。

「わかるけど？」

「たぶん……アヤは、彼の事が好きなんだと思う」

それからエリはアヤカの好みが彼に近い事などを話し出した。それを聞くと、

彼が、彼女の好みのタイプと合致しているのは、よくわかるのだが、それと彼女が酔っ払う事と、どう繋がるのかわからない。

俺は、その点を訊いた。

「前にさ……こういう事があってね」

エリは、ゆっくりと順序立てて話し出した。

それによると、俺が参加する以前に、

サークルの飲み会で酔い潰れた子がいたらしい。

その子は、俺とは違う大学の二年生で、

髪が長く清楚な雰囲気があり、その時が飲み会初参加だった。

初々しさが災いして、

何も勝手がわからず勧められるままに酒を飲み過ぎてしまったようだ。

明るい子だったから、

積極的に色んな人から話しかけられていたせいもあるかもしれないし、

酒を断らない様子だったのもいけなかったのかもしれない。

とにかく色んな要因があつて、

その子はアヤカのように酔い潰れてしまったらしい。

その子を連れてきた友人は女の子だったから、

どうしようか困っていた時に、

さつき話に出た主催者の友人が送っていくと名乗り出たらしい。
酔い潰れた子を背負って、

その子の友人の案内で家まで運んで行ったようだ。

俺は、それを聞いて可笑しくなった。

（まるで今の俺達じゃないか）

エリは言った。

それ以降、アヤ力が酔い潰れる機会が増えた気がする、と。
エリの推測によると、

おそらくアヤ力は、サークルの飲み会で酔い潰れれば、
その子と同じように彼が送っていつてくれるのではないかと
考えているんじゃないか、と。

だから、そうして、わざと隙を見せているんだと思う。
彼女なりのきっかけ作りなんじゃないだろうか。

そんな事を言った。

「でも……こうして俺達が送っちゃってますよね」

「そうなの」

エリは困ったような調子だ。

「私も最初は、そんな事わからなかったから、
無理矢理、連れて帰っちゃったのよね。」

で、その時は、何か嫌な事でもあったのかな？

くらいにしか考えてなかったんだけど、

次も、その次も寝てしまうくらい飲んで……

これは変だっと思うじゃない。

やっぱり急に潰れる回数が増えた訳だし……」

俺は、アヤ力を置いてエリが先に帰ってはどうか？と訊いた。

「そうなんだけど、それも心配だし……」

エリは、そこで立ち止まった。

「このサークルは比較的健全だからさ、あまり変な人いないけど、
それでも酔った女の子一人残していくのは心配なんだよね」

「確かに、そうですね」

「その彼が送ってくれる保証はないしさ」

じゃあ、エリがいない時はどうするのだろう？

アヤカ一人で来る時もあるだろう。

「それは、ないよ」

エリは俺の疑問を否定した。

飲み会に参加する時は、二人で来るようにしている、と言った。

「えっ……でも……」

俺は、前回一人で彼女を家まで送っていった事をエリに話した。

当然、部屋に入ってから部分の部分は削って簡潔に説明する。

「えー、そうなのー？」

エリは、それを聞くと驚いて、

それから、俺が一人で送り届けた事に対して礼を言った。

俺は気恥ずかしいような思いがした。

そうして並んで歩きながら、

他にも、御互いの頭に浮かんだ彼女の言動に対する

細かい疑問点なんかを話し合った。

「だからさ……」

エリは俺に、こんな御願いをした。

今、話したのは全部私の推測だけど、多分間違っていないと思う。

そうだとすると、もし万が一、

アヤカの目当ての彼女が彼女を心配するような素振りを見せたり、

送っていくような感じがしたら放っておいて欲しい。

それが意味のある事には思えないけど、

彼女は、それを願っているだろうから間接的に協力してあげて欲しい。

い。

俺は、反対する理由もないので素直に頷いた。

そうして話していたら、

もう駅が目の前に来ていて、俺達は揃って電車に乗った。

「そう言えば、その最初に酔い潰れた子って今もいるんですか？」

俺は、何となく頭に浮かんだ事を訊いた。

「最近、見ないわね」

「何かあったんですか？」

「そうじゃないわよ。」

それって結構、前の話っていうのもあるし、

一度で来なくなる子も多いしね。珍しい事じゃないわ」

「もう長いんですか？」

エリの口振りから

サークルでのキャリアが長そうな気がしたので、そう訊いた。

「一年くらいかな。アヤも一緒」

そんな話をしていたら俺の降りる駅に着いた。

エリとの別れ際の挨拶が、

前よりも親しみのこもったもののように感じて少し嬉しくなった。

4

それから九月に入るまで、エリにもアヤカにも会っていない。

俺は、その一ヶ月を卒論とバイトに費やしていた。

大体、八対二くらいの割合で、

卒論の合間にバイトをしていた、という感じだ。

時々、大学図書館に行ったりもした。

俺は大学近くで一人暮らしをしていたから、

買い物とか家事とか日常の雑事をこなしていく間の、

ふとした瞬間に彼女達を思い出す時もあった。

八月の別れ際に、

エリと話した内容が、時間の経過に従って、

湧き出すように幾つかの新たな疑問を

俺の中に提出してきたのが原因だった。

それらは、例えば、

三回目の飲み会の日、もし俺がいなかったら、

エリはどうやってアヤカを連れ帰ったのだろう、とか
五回目の時に、俺がいなかったら、

それでもアヤカは酔い潰れたのだろうか、
などという頭の隅から不意に湧いたもので、

且つ、答えの出ない疑問であつたから、

俺は、すぐに考えるのを止めてしまった。

それでも忘れた頃に繰り返し、

それらの疑問は脳裏に浮かんできた。

この夏を振り返って、思い出されるのは、

卒論ばかりに取り組んでいた、という事と

今年は田舎に帰らなかったな、という事くらいだ。

出来れば帰省した方がいいのだが、

家でも、こちらの事情を酌んでくれて、

あまりうるさく帰って来い、とは言わなかった。

そうして、後期も始まる頃には卒論も目途がついてきて、
飲み会に参加する余裕も出来てきた。

九月の中旬。

いつもの駅前で集合すると懐かしい顔ぶれがあつて、
その中にエリもアヤカもいた。

エリは少し髪が伸びていた。

アヤカの方は更に髪を巻いている。

二人とも若干、陽に焼けて肌が黒く見えた。

俺達は久しぶりに再会した友人みたいに話し合った。

店に入っても三人で固まっでいて、

この一ヶ月の間に起こった平凡な日々を語り合った。

ただ、俺は平常心でいられなくて、

アヤカに気付かれないように、時々、主催者の方を盗み見たりした。

その男は、今日も来ていて主催者と談笑している。

俺達の席とは五メートルほど距離があつた。

そうしていたら、アヤカは、久し振りに飲み比べをしよう、と言っ。俺は、最初、断った。

彼の目の前で、俺と二人だけで、そういう事をするのが、アヤカにとつて好ましくない結果を招くような気がしたからだ。しかし、彼女は譲らなかつた。

勝手に店員を呼び止め、同じ飲み物を二つ注文する。暫くすると、目の前に同じグラスが二つ並んでいた。

俺は、どうしたらいいのかわからなかつたが、

彼女は「さあ、かかつてきたまえ」

と言つてジョッキを持ち上げて待っている。

エリに目を向けたが、何も言わなかつた。

目だけが『仕方ないわね』と苦笑しているように見える。

俺は、仕方なく、それに付き合う事にした。

アヤカは嬉しそうにグラスを合わせる。

胸に響くような高い音がした。

それから何杯か飲んだが、

俺は前回よりは半分早い段階でギブアップした。

アヤカは不満そうだったが、

自分の勝利に満足したような態度を見せる。

そうやって早い段階で飲み比べを止めたり、

話に集中させて彼女を酔わせないようにしていたので、

今日はアヤカが潰れる事なく、会も御開きの時間になった。

俺は、安心して席を立て帰ろうとすると、

「一緒に帰ろうよ」

アヤカが声を掛けてきた。

三人で帰ろうという意味らしい。

と、言つても一緒なのは、精々、二駅だから大した時間じゃない。

わざわざ改まって並んで帰る事もないだろう、

と答える前に、さつと俺の腕を取つて席から引つ張り出す。

三人で駅に向かい、最初に来た電車に乗った。

店から、アヤカが降りるまでの間に三人でした会話の主な内容は、俺の態度が余所余所しい、という事だった。

「もつと飛び込んで来い」

とはアヤカの言葉。

「遠慮してるの？」

とはエリの言葉だ。

「歳下の私達がタメ語なんだから俺くんも、そうしたら？」

と声を揃えて言われた。

学年は同じだが、歳は俺の方が一つ上だ。

二人は歳上から敬語を使われるのが気に入らないらしかった。それから、こんな事も言われた。

「ほら……試しに『アヤちゃん』って言うてごらん」

電車のドアに貼り付けられた広告を背にして

アヤカの猫目が見上げてくる。

「……………アヤちゃん」

「声が小さい！」

「……………アヤちゃん」

「てゆーか『アヤ』でもいいよ」

「それは、ちよつと……………」

「なんでよ！」

「彼氏とかでもないし……………」

俺は、この窮地を遣り過ぐすのに必死だった。

アヤカは腰に手を当てて、俺に喰って掛かってくる。

「てゆーかね、

飲み会の度に家まで送らせるは、

話せば敬語だっていうんじゃないか、

何か私達があんたをパシリに使ってるみたいに見られるでしょ？」

（その通りじゃないか）

内心、そう思ったけど、口では反対の事を言う。

「そんな事はないんじゃないかな」

「何で、そう言い切れるのよ。」

「違ったら迷惑するのは私達なんだからね」

「迷惑？」

「だって、そうでしょ？」

「こっちは、そんな気、全然ないのに、」

「あんたを良いように使ってるみたいに見られるのよ。」

「どんだけ酷い女だって話じゃない」

「もう、呆れて返す言葉がない。」

「……とにかく、例えば、」

「あんたが私の事を『アヤ』とか『アヤちゃん』とか呼んでいれば、周りの人達は、『あ、あの三人は仲がいいんだな』って思うし、送ってもらったとしても不自然じゃないでしょ？」

（御前が酔い潰れたりしななければ、いいだけの話じゃないのか？）

「という反論が沸々と湧いてきたけど黙っていた。」

「それから、似た意味の言葉を散々言われた。」

「要するに、もっと打ち解ける、という事だ。」

「俺は、」

「なるべく普通に話すようにする。」

「『エリちゃん』『アヤちゃん』と呼ぶようにする。」

「など幾つかの要求を突きつけられて、」

「強引に、それを了承させられた。」

「他にも、三人で映画に行かないか、という話も出た。」

「当時、話題の映画で、」

「どこでやっているのかと場所を訊くと、」

「俺の大学から電車で少し行った駅にある、」

「高層ビルの中の映画館だった。」

「そこには、以前、行った事がある。」

「二人は勝手に盛り上がった、」

「その勢いで俺を誘ってきたが、適当な事を言って断った。」

何て強引な女達だと思っていたのだが、それが彼女達なりの気の遣い方だったのだな、と後になって思った。そうしていたらアヤが降りる駅に着いた。

彼女が降りると、エリと二人だけになった。

エリは、それまで口数が少なかったが、

アヤが降りると話しかけてきた。

「今日は、ありがとね」

彼女は俺がアヤに気を遣っていたのをわかっていたようだ。

こうして二人だけになって話してみると、

エリがアヤを気に掛けているのがよくわかる。

俺は、先月の話を聞いてから飲み会に行くのが不安でもあった。いつその事、

彼女達とは、もう関わらない方がいいのではないか、とも思った。

もし、アヤの気になっていいるらしい男が、

彼の方でもアヤを気に掛けているなら

俺が近くにいない方が彼女にとってもいいだろう。

そう考えると、彼女への接し方は難しい。

その頃には、俺は飲み会参加者の常連の間では、

彼女達と一番仲が良いように見られていたから、

今更、飲み会に参加して彼女達とは話もしない、

というのは、あまりに不自然だった。

ならば、飲み会自体の参加を止めるのが、

一番不自然でないのではないだろうか、

などという考えが何度も浮かんできた。

しかし、エリを見ていると、

気を遣わないように振舞う事が気遣いになるという場合もあるのだ、
というのを思い知らされる。

おそらく俺が考えたような事は、既に考えてきたのだろう。
その上で、無関心を装ってアヤの挙動に注意を払っている。

そんな気がした。

そう気付いた時、

俺は今日、初めて、この女を尊敬の目で見ているのを自覚した。窓の外を流れていく夜景を眺めていると、彼女は、こんな事を言った。

「でも……もしかしたら

今日は飲ませてあげた方が良かったのかもしれない」

少し髪の伸びたエリは何だか大人びていて違う人のようにも見えた。

「どういう事？」

「うーん……まあ色々あるのよ」

「色々って？」

彼女の言葉の意味を詳しく訊いてみたかったけど、車内にアナウンスが流れて俺の降りる駅に着いてしまった。

俺は名残惜しく扉の開くのを待つ。

電車を降りようとした時、彼女が言った。

「また、サークル来てよね」

足元に気を付けながら、俺は振り返って頷いた。

開いた扉越しに見詰め合う。

それは長い時間、続かなくて、すぐにベルが鳴って扉が閉まった。ゆっくりと電車は走り出す。

俺は、それを見送ってから階段を上がって改札に向かった。

十月になった。

後期が始まっているが授業は殆どなく、構内で知り合いに会う機会は減っていた。俺は、相変わらず卒論に取り組んでいて、土日も、大学図書館に足を運んだ。

その日も、日曜日で、いつものように

午前中から図書館で調べ物やコピーを取ったりしていた。午後には用事も片付いて、大学最寄り駅の近くにあるマクドナルドで遅めの昼食を摂る事にした。

二時を過ぎているせいか、店内は空いていた。窓際の席を選んで座る。

ガラスの向こうに行き交う人を眺めながら、ハンバーガーを噛り始めた。

夏の暑さはすっかり遠退いて、道行く人達は長袖が多い。テイクアウトにして公園とかで食べてもいいな、なんて考えていた。ぼんやりとしながらも半分は卒論の事が頭にあった。

いつの間にかハンバーガーが片付いていて、残ったコーヒを飲んでから席を立とうとしていた時、不意に肩を叩かれて振り向いた。

「やっぱり俺くんだあー」

そう言って、俺の前の席にアヤが座った。

俺は四人掛けの席に座って隣に鞆を置いていたんだけど、彼女もそれを真似して鞆を置いた。

シャツにジーンズという今まで見た中では比較的ラフな格好。彼女は向かい合っていると、驚いている俺に構わず、一方的に話し出した。この近くまで買い物に出て、ちょうど食事が終わった所。

洋服を買いに行ったけど、いい物が見付からなかった。

一緒に行った友達とは食事が終わると別れた。

帰る前に、この近くにある洋服屋に一人で行ってみようと思っていた。

その店に向かう途中で、

その道を通ったら、外から俺くんの姿が見えた。

などと一緒に語ってしまうと、

「で、俺くんは何してんの？」と訊いてきた。

俺は現状を簡単に説明する。

「じゃあ、この後、予定は？」

特別な予定はない、と答えると、飯でも行くか、と言い出した。

(今、まさに食事中なのにな?)

俺は、そう訊き返すと、アヤの行きたい店に寄って、

駅まで戻って、電車で、いつも飲んでいる駅まで戻れば、

夕食にもいい時間だろう、という事だ。

彼女の昼食は軽いものだったし、

俺が今、食べたものも量が多くないから、

少し時間が経てば、お腹が空いてくるんじゃないか、と言う。

正直な所、何となく気が進まないのもあったが、

断る尤もらしい理由も思い付かない。

何か口実を考えている内に、彼女は俺の腕を取って席を立たせる。

「じゃあ、決まりね」

そう言つと、さっさとトレイやゴミを片付けてしまった。

俺は、自分の鞆と彼女の鞆を持って、後を追う。

「ありがと」

彼女に鞆を渡すと礼を言つて、目的の店まで俺を案内した。

その店は、マクドナルドから

歩いて二、三分の場所にある小さな個人経営らしい店だった。

彼女は、ほんの五分くらいで見切りをつけてしまい、店を出た。

それから、駅まで戻る道すがら何軒かの店に入った。

それは、洋服屋や雑貨屋で、どれも十分ほどで見終わってしまった。

最後に、駅から一番近い洋服屋を空手で出てくると、

「今日は駄目ね」と言つて不満そうな顔を見せた。

気に入った物がなかったらしい。

俺は慰めの言葉を掛けた。

そんな日もあるよ、みたいな感じで。

すると、彼女は俺を見上げる。

「まあ、俺くんが、そう言うなら許してやるか」

それから、俺達は電車に乗つて、

アヤの家の最寄り駅である二つ隣の駅まで行つた。

食事をしたり、酒を飲むという事になれば、

普段、飲み会が行われている駅が便利なのだが、

そこは行き慣れているので勝手がわかつている半面、

飽きてしまつてもいた。

すると、アヤが、いい店を紹介すると言い出したので、

俺は、それに従う事にした。

それがアヤの家の最寄り駅近くにある店だった。

改札を抜けると、先導するように彼女が歩いて行く。

何度か送つて来た時に、

この駅で降りた事はあつたが、彼女の家までの往復だったので、

現在、歩いている辺りは殆ど様子がわからない。

彼女の背中を追って行くと、

何度か角を曲がった細い通り沿いの店の前で止まった。

木の大きな看板が立てられていて、

そこに毛筆で店名が書いてある。

あちこち寄っていたので、もう五時を過ぎていた。

営業時間を見ると、ちょうど、開店したばかりのようだ。

「いい感じの店だね」

「でしょ？」

俺達は揃って店内に入った。

メニューを見ると、和食を中心にした居酒屋という感じ。

鍋物もあったし、酒の種類も豊富だった。

ビールと幾つかのつまみを頼む。

早い夕食だったが、

歩き回った上に時間が経過したのもあってか、御互い勢いよく食べた。

四人掛けのテーブルを埋め尽くした皿が次々と片付いていく。

俺達は、向かい合って箸を伸ばし合った。

食事中は、彼女の面白い物話と大学の話をした。

時々、卒論や研究関係の話になって、

ここは、こうじゃないか、みたいな議論が交わされた。

それから、

彼女が俺の個人的な事を訊いてきたので、それに答えたりした。

出身地や家族構成や趣味などだ。

サークルの話は出なかった。

俺からもしなかった。

エリの話も出なかった。

そんな感じで時間が過ぎた。

彼女は自重しているのか、酒を二、三杯しか飲んでいない。

これは、普段の彼女からすると、想像を絶する少ない量だ。

途中、彼女が提案した飲み比べを、

俺が断ったのも原因かもしれない。

それに、あの男がいないから酔う理由もないのだろう、と思ってい

た。

もう大分食事も進んで、あと一品か二品で終わりだろうか、
と思っていた頃、彼女が俺に言った。

「ねえ……携帯見せてよ」

俺は不審に思ったけど、ポケットから携帯を取り出した。

今まで、何度か思った事だが、彼女に頼まれると何となく逆らえない。
威圧的だ、というのではない。

何かあっても何となく許してしまえるような、そんな雰囲気がある。
例え、トラブルに巻き込まれたとしても、

あの猫目で「ごめんね」と上目遣いに言われると
仕方ないな、って思ってしまうのだ。

だから、だろう。

何度か彼女の家まで送らされる羽目になっても、
次に会った時に謝られれば水に流してしまっていた。

愛情とも違うし、憎めない奴、という言葉でも片付かない。

きっと、エリの方でも、似たような気持ちを持っているのではない
か。

それは、俺の勝手な想像だったが。

しかし、そうでなければ、エリが、

あれだけアヤの世話をするのが説明出来ないような気がした。

それとも、俺の知らない事情があるのだろうか。

俺が携帯を見せるようにすると、

彼女は素早く対面から手を伸ばして、それを取り上げた。

「おいっ」

そう言っ取り返そうとすると、

俺の届かない所で携帯を触り出した。

「何する気？」

別に見られて困る訳ではなかったけど、気分のいいものではない。
すると、彼女は含み笑いをして言った。

「私のアドレス入れてあげるよ」

「えっ……」

「何？……何か文句あるの？」

少し睨まれる。

僅かに頬が赤い。

「いや、そうじゃないけど……」

（だったら最初から、そう言えばいいのに……）

心の中で呟いたが、彼女の好きにさせた。

それから、

彼女は俺の携帯のボタンを何度かいじったりしていたけど、
急に変な声を上げて俺の方を見た。

「何これ？」

「何？なんか変？」

俺は携帯を覗き込むように身を乗り出す。

「あんた、友達いないの？」

隣れむような眼差しを向けてくる。

俺は意味がわからず首を傾げた。

すると、彼女は携帯の画面を俺の方に見せて、言った。

「だって、これしか登録ないじゃん」

画面には俺の電話帳が映し出されている。

彼女が言うのは、その登録数が少ないと指摘しているのだ。

「えっとお……実家？とバイト？と……あと男？」

……これ全部合わせても十件くらいしかないじゃん」

そう言つて、頻りに携帯を操作している。

「えっ？……シークレットにしているとかじゃないよね？」

俺は首を振った。

何度かボタンをいじっていた彼女も、漸く顔を上げた。

「俺くんって、本当に現代人？」

彼女の瞳が愉快そうに光った。

俺は、その理由を簡単に説明した。

少し前に携帯を失くして、バックアップもなかった事。

それ以降、新しく知り合った人が少なく登録する機会もなかった事。
自分の行動範囲が大学、バイトと狭い事。

それらの理由で、

あまり携帯を使わなくても不便を感じない事などを話していった。
そう言えば、

最近になって、サークルの主催者の男とアドレスを交換したくらいで、

それ以前となると、ちょっと思い出せない。

俺の話が終わると、彼女は呆れたように笑い出した。

「そうなんだあ……」

いやあ、私さ、こんな登録が少ない人、初めて見たから、
ちょっと驚いちゃって……ごめんね」

両手を合わせて軽く頭を下げる。

それから、口の中で何度も「そっかあ」と呟いた。

そして、何度か頷いた後、

「じゃあ、この携帯は、私が女子一号だね」と言った。

彼女の顔は、

徒競走で一位になった時のような、ある種の誇らしげな影があった。
きつと、そんな下らない事でも『第一号』という響きに、

何かしら彼女だけがわかる優越感があったのだろう。

「そうだね」

「俺くん、これからは遠慮なくメールでも電話でもしてきたまえ」

「はいはい」

「……はい。これ私のアドレス入れておいたから、後でメールして
よね」

「うん」

「それから、パソコンもあるでしょ？」

「持ってるよ」

「そっちのアドレスも送っておいてね」

「何で？」

「そっちの方がいい場合もあるでしょ？私も後で送るからさ」

「わかった」

俺は、そう約束をして携帯を受け取った。

店を出ると、すっかり暗くなっていた。

夏は、もう遠い昔だ。

念の為、彼女を家まで送って行った。

何度も通っただけあって慣れたものだ。

きつと、案内なしでも彼女の家まで楽に辿り着けるだろう。

少なくとも彼女の家から駅までは絶対に迷わない自信があった。

「ここで、いいよ」

アパートが見えてくると彼女は、そう言った。

俺は、それに従って踵を返す。

御互い「さよなら」と言い合って別れた。

駅への道は人通りが多い。

今まで、この道を通った時は、もつと遅い時間だったから、

こんなに早い時間に、この道を歩いているのが不思議な気がしてくる。

そんな事を考えていたら、いつの間にか駅に着いた。

見上げると、漆黒の高い空がある。

ホームに下りると、すぐに電車が来て、俺は、それに飛び乗った。

6

アヤからアドレスを渡された次の日に、早速メールを送信した。

件名には、自分の名前を。

内容は携帯のアドレス、電話番号、パソコンのアドレスを書いた。他には何も無い。

至ってシンプルな内容だった。

携帯のアドレスは表示されるだろうから必要なかったが念の為、付けておいた。

彼女の返信は、その日の内に来た。

件名、内容とも俺のメールと大差ないものだった。

ただ、「いつでも連絡したまえ」という言葉と顔文字があった。ほんの少しだけ自分の世界が広がったような気になったが、交換したアドレスは、殆ど活用されなかった。

と、言うのも、俺は相変わらず卒論に取り組んでいたし、彼女の方も似たような状況みたいだった。

パソコンの方のアドレスは主に学校関係の連絡などに使っていたから、

時々チェックをしていたけど、彼女からのメールは届いていなかった。

そうしている内に、十一月が終わって師走になった。

ここ一ヶ月、サークルの飲み会にも顔を出していなかったので、気分転換の意味もあって参加する事にした。

参加者は十五人程度。

色々忙しいせいか、人は少なく見えた。

アヤはいない代わりに、エリがいた。

遅れてくるのか、と思っていたが、彼女は最後まで来なかった。途中で俺は、アヤが来ないのかとエリに訊ねた。

「なーにー？俺くん、気になるの？」

そう言っで、にやけながら、今日は来ないよ、と教えてくれた。どうやら後期に取った授業のレポートが終わらないみたいだ。卒業に関わってくるから終わらせない訳にはいかない。

その日は、エリと二人で話し合った。

彼女の卒論は順調で完成間近な事や単位も問題ない事を聞いた。どちらかと言うと、アヤの方が心配で、

幾つか落としそうな授業もあるらしかった。

「でも、大丈夫だと思うよ」

あまり危機感がない調子だったから、おそらく平気なのだろう。

余裕のあるエリからするとアヤの状態が不安に見えるに違いない。飲み会に参加した他の人達の話も聞こえた。

一番の話題は

来年度、誰が、このサークルの中心になっていくのか、という事だった。

何人か候補の人間がいるが、

彼等が引き受けなければ、このサークルは終わってしまうだろうし、仮に引き受けてくれても、

人が集まらなければ続けていくのは難しいだろう。

俺は、皆が集まる目的がない事が、

このサークルの価値だと思っていた。

成人した人間が毎週のように意味もなく集まってきた、

あれこれと好き勝手に語り合う事に意味があると思っていた。

しかし、反対に、

集まる意義もないのに人が集まったって時間の無駄だ、

と言う人間もいるとも思っていた。

だから、このサークルが受け継がれない可能性もあるだろう。

それは仕方ない事だ。

他にも卒業や卒業後の進路に関する話題が出た。

「何となく寂しいね」

エリは交わされる話が、そういう内容ばかりなのを嘆いた。

俺も、それに頷いて同意する。

向かいの彼女を見る。

彼女の髪は会った頃よりは随分伸びていて、

今は、もう肩に届きそうになっていた。

そのせいで、妙な女らしさを漂わせている。

どちらかと言うと、彼女は、あまり酒を飲む方ではない。酔って騒いで、というのを嫌っている風でもあった。

だから、こうして二人で飲んでいると、静かな席になる。

アヤがいらないせいで、余計に落ち着いた雰囲気になった。

場も終わりかけになると、俺達は席を立った。

アヤと、噂の彼が気になったけど、

最後まで、どちらも姿を見せなかった。

別れ際、「今度は三人で、どっか行こうよ」とエリが言った。

俺は、それに頷いて彼女の乗る電車を見送った。

エリとの約束は、別の形で果たされる事になった。

師走も半ばを過ぎて、あと二週間で今年も終わるという頃、

俺達三人で食事をする計画が持ち上がった。

三人だけの忘年会という位置付けらしい。

アヤが発案し、それにエリが賛成して俺に話が回ってきた。

俺は、それに賛成だけして計画の殆どを彼女達に任せていた。

日時は一週間後の日曜に決まった。

約束の日が近づくにつれて、

会場になる店を予約した事や待ち合わせの時間などが、

アヤからメールで送られてきた。

直前に一度、

アヤから電話がかかってきて最終的な打ち合わせをした。

当日は、冬らしい日で、気温が低く空には厚い雲がかかっている。

午後になっても薄暗いままで、日差しは地上まで届いてこなかった。

予約をした店は、

アヤの家の最寄り駅から近い場所にあったので、

彼女の家が集合場所だった。

俺は、一番遠いエリと途中で合流して、アヤの家に向かい、それから店に行くという段取りになっていた。

約束した時間の電車でエリと合流すると、アヤの家に向かう。もう少しで降りる駅に到着するという頃、エリの携帯が鳴った。

彼女は駅に到着するまで待って、電車を降りてから掛け直す。

俺はホームの離れた所で電話が終わるのを待っていた。

彼女は通話が終わると、俺に寄って来て、

済まなそうに電話の内容を説明する。

エリの卒業後の進路は、大学院に決まっていた。

試験の結果も出て、幾つかの手続きも終えて、

あとは、自分の研究を続けていけばいい、という状態だったようだ。その担当教官からの電話で、

研究関係の打ち合わせをしたい、という事らしい。

どうしても年内に決めておきたい事があったのが、

教官の都合で年内は今日しか余裕がなくなってしまったらしい。

最近では日曜日でも大学に行く事が多い彼女なので、

急だが出て来られないか、という話だった。

相談の結果、

エリの用事が済むまで、俺はアヤの家で待っている事にした。

一度帰るのも面倒だし、外で待っているような気温ではなかった。

アヤに、その事を連絡して俺達は別れる。

彼女は、もう一度電車に乗って、

俺は改札を出てアヤの家に向かった。

アヤの家に着くと、彼女は俺を招き入れる。

玄関までなら何度か入っていたが、こうして上がり込むのは初めてだ。

造りは1DKで、キッチンが広めなのが特徴的だった。

「適当に座って」

部屋に通されると空いているスペースを指して、アヤが言った。

小さなガラステーブルの前に座る。

彼女が淹れてくれた御茶を飲みながら、

駅でのエリとの遣り取りを、もう一度繰り返してアヤに聞かせた。

エリが電話で話してあったはずだが、他に適当な話題も思い付かない。

間を繋げるようにしながら、出された御茶を飲んだ。

「まあ……とにかくエリからの連絡待ちだね」

アヤはベッドの端に座って、床に座る俺を見下ろしている。

それから、取りとめもない話をした。

中身があるようで、ないような、軽い話題。

彼女は、雑誌に載っていた洋服の話や見たい映画の話、

年末年始の予定や大学受験を控えている実家の妹の話なんかをした。

俺は、それを聞きながら、ふと前回の飲み会で

アヤの単位が厳しいみたいなの話をエリから聞いていたのを思い出したので、

その辺がどうなっているのか尋ねた。

「うん、大丈夫……」

「あ、よかったね」

「……と、思う」

（思う、かよ！）

俺は心の中で突っ込んだ。

「あー、でもホントに大丈夫だと思うよ、うん」

彼女は何度か頭を掻いて、「心配かけてごめん」と言った。

そうやって一時間くらい話をしていて、

エリからの連絡を待ち侘びていた頃、アヤの携帯が鳴った。

正直、話題も尽きかけていた頃だったから、

携帯が鳴って「エリだ」とアヤが言った時には助かった思いがした。

彼女は通話を始めると何度か頷いた後に一瞬驚いて、

それから「ちょっと訊いてみる」と言って、俺の方を向いた。

「なんか……まだ、結構かかりそうなんだって……」

「あ、そうなんだ……どれくらい？」

「ちよっと、はつきり、わからないくらいなんだけど……」
「うん」

「で……なんか雪も降ってきてるらしいし」

「えっ？」

俺は、反射的に窓の方を向いた。

彼女は立ち上がった窓に近付きカーテンを開いた。

俺も傍に寄って二人で空を見上げると、

確かに白いものがちらちらと降ってきているのが見える。

「ホントだ……」

無意識に呟いた。

「だから、申し訳ないけど延期に出来ないか？って言ってるんだけど」

相談の結果、エリの提案を受け入れて、今日の予定は止める事にした。

予約した店にはアヤの方から連絡を入れておく、という事で電話を切った。

「せっかく決めたのにね」

残念そうに溜息をつく彼女。

「まあ仕方ないよ」

俺は慰めるように言うと、頭の中で今後の予定を検討し直した。

今日は夕食を外で済ますつもりだったから、自宅には何も用意していない。

帰りに何かを買っていくか、どこかで食べていくか、
どうしようか迷っていたら、「何か取るうか？」と彼女が訊いてきた。

雪が降っているから、すぐ帰るよりは様子を見た方がいいし、
自分も、これから夕食のつもりだったからお腹は空いているし、
何も買い置きがないし、それだったら天候を窺いながら、
何か頼んで一緒に食べていけないか？という事だった。

「雪はどうなのかなあ？」

その意見には賛成だったが、これから更に雪が降り続くようだった
ら、

すぐに帰った方がいいんじゃないだろうか。

「ちよっと待ってて」

彼女は、テーブルにあったパソコンを起動させた。

暫く待っていると静かなファンの音がしてデスクトップが現われる。
壁紙は子猫の画像だった。

灰色で縞模様の猫達が可愛らしく転がっている。

ネットに繋がると、

天気予報のページを開いて、気象情報を確かめ始めた。

「うーん、『所によって雨または雪』ってなってるから、
暫く待ってれば止むんじゃないかな？」

「そう？」

「うん、どっちにしても明日には晴れるみたいだし、
これを見る限りは一時的つばいけどね」

結局、天気予報と彼女を信じて、

暫く、ここで待機させてもらう事になった。

「何にしようか？」

彼女は、どこからパンフレットみたいな物を出してきて俺に見せ
た。

それはピザ屋の広告で、俺達は二、三人前のピザを一つ頼んだ。

飲み物は彼女が用意して、ピザが届くのを待った。

ピザは三十分で来なかったが、天候の割りには早く届いたと思う。

配達の方は現金を受け取ると、寒そうに出て行った。

それから、

彼女が淹れてくれた紅茶を飲みながら一切れずつ食べ始めた。

少し食べてから、カップに手を伸ばして一口飲むと、変な香がした。
「これ、何か入れた？」

俺が問うと、彼女は俺と同じように一口飲んでから、それに答えた。

「焼酎割りです」

「いや、普通のでいいんだけど」

「あつたまるかな、と思つてね」

「充分あつたかいし」

ピザを頼む頃には、

彼女の部屋で落ち着いていく方向で話が決まっていたので、エアコンをつけてカーテンを閉めていた。

陽は落ちて気温が下がってきていたが部屋の中は暖かく、

俺の着てきたダウンは部屋の隅で丸まっていた。

その上、焼酎割りだ。

暑くなつて、二人とも上着を一枚脱いだ。

意外に、酒とピザの相性が良くて、

俺達には量が多いと思われたピザは簡単に片付いてしまった。

空き箱を片付けて、食後にもう一杯紅茶を出してもらつた。

今度も焼酎割りだ。

「今日、残念だったね」

彼女は俺に、そう言つて予定の変更を悔しがった。

「でも、また今度があるよ」

「そうだね」

それから、三十分くらい、エリの話や大学の話をしていた。

ふと、外の様子が気になつて見てみると、まだ雪が降っていて、うっすらと道路に積もりつつある、という感じだった。

心なしか、さっきよりも粒が大きい気がする。

窓の傍から振り向いて報告する。

「まだ降つてるね」

「そう……」

彼女は気のなさそうな様子で、何となく上の空だ。ベッドで足を組みながら足元に視線を向けていた。カーテンを戻して、元の位置に座り直す。

俺は、どちらにしても、

そろそろ帰った方がいいんじゃないか、という気になっていた。
アヤにも都合があるだろうし、全く帰れないという天候でもなかった。

電車も止まっていないと思う。

今日の事は残念だったが、

彼女にも言ったように次の機会もあるだろう。
それを、いつ切り出そうかと考えていた時に、
彼女は俺に変な事を訊いてきた。

「俺くんってさ……彼女いないよね？」

何の脈絡もない突然の発言に意表を突かれた。
戸惑いながらも反射的に頷く。

すると、彼女は俺の携帯の登録状況から、そう判断した、と言った。
なるほど。

内心、納得する。

しかし、だからって、それがどうしたというのだろうか？

彼女の次の言葉は、それに続く内容が来るものと予期していたが、
予想に反して全く関係のない問いを俺に投げ掛けてきた。

「私って……女として見れないかな？」

「は？」

「だから……例えば、よ。」

例えば……私が俺くんにつき合って……とか言ったら、どうする？」

「考えた事もないし……」

「そこを考えてよ」

「うーん………わからないなあ」

戸惑っている俺に、彼女は詰め寄る。

「じゃあさ、……じゃあ今、こうして部屋に二人でいるじゃない？」

「うん」

「こう………何か感じたりしない？」

「何かって？」

「だから……ムラムラツとか、襲いたくなったりとか……」
「いや、殴られそうだし……」

俺の冗談に彼女は笑わなかった。

彼女は一度、小さな溜息をついた後、

カップを傍に置いて身を乗り出すように語り出す。

そこからは、俺に対する言葉が更に直截的になって、

最近ヤツタのはいつだ、とか私に魅力を感じないのか、とか、
どういう女が好みなんだ、とかいう質問攻めになった。

俺は何とか誤魔化して、それらの質問を交わしていたが、
業を煮やしたように彼女はベッドを降りて、俺に近付いてきた。
そして、

胡坐をかいて座っている俺の正面に腰を下ろすと、
両手を俺の肩に回して顔を覗き込んできた。

外出する予定だったから、

彼女の服装はジーンズにシャツという格好だったのだが、
その上着を脱いだ為、今、着ているのは薄い長袖だけだった。

しかも襟元は大きく開いていて、

そんな風に向かい合って下から見上げられると、

自然と胸の谷間が覗けてしまう。

「どうなの？」

更に、彼女は見詰めながら問い掛けてくる。

背中に回された両手は絞られるように縮んできて、

そうすると俺と彼女の距離は次第に埋められていった。

もう御互いの顔は目の前で、膝元は密着しているし、

俺が手を伸ばして抱き寄せれば、簡単にキスが出来そうな体勢だった。
た。

形は違っても、あの日、初めてキスした時の情景が思い起こされた。
彼女の魅力の有無を問われれば、否定的な意見は出るはずもない。
それは、こうして間近に迫られなくても充分に伝わってきた。
しかし、

女性的な魅力と対象の好悪は比例しないのではないだろうか。
美しいものを全て好きになるとは限らないように、
醜いものを全て嫌うとも限らなかった。

彼女に女性的な魅力がある事と、
俺が女性として彼女を見るかどうか、という事は別問題のように思う。

それを何とか言葉にして伝えたい、と思った。
しかし、それを上手く、簡潔に伝えるような言葉を思い付かない。
下手な表現をして誤解されるのを、俺は恐れた。

どこからか、いい匂いがする。
ウェーブした長い髪か、首筋か、それとも回された両手からなのか。
その香は二人の周囲を取り巻いて、絡みつくように拘束するように、
俺に迫ってくるように感じられた。

蜘蛛の巣に捕らわれた蝶の姿が頭に浮かぶ。

前を見ると、彼女の瞳が、こちらを見返している。

その瞳は蜘蛛よりも美しく、俺は射竦められたような思いがした。

そうして、どれくらい無言の時間が過ぎたのかわからなかったが、
俺は、やっと彼女に反撃出来るだけの言葉を見付けた。

「アヤちゃんは、好きな人がいるんだろ？」

なるべく胸元を見ないように言ったので、

結果的に彼女を睨むような形になってしまった。

「何が？」

彼女は最初、意味がわからない、という顔をした。

俺は、そのあからさまな惚けぶりが気に入らなくて、
似たような言葉を繰り返した。

なるべくエリから聞いた話とはわからないように、
ぼかしたり、こっちは何となくわかってるんだ、
という態度を見せながら、エリからされた男の話をした。
その話を聞いた時から、もう大分、時間が経っていたが、

かなりの部分を正確に思い出す事が出来た。

話の後に、驚くアヤの姿が目に見えかぶ。

しかし、それを黙って聞いていた彼女は、

俺の話が終わると、呆れたような顔を見せた。

「それ……きつと、エリから聞いたんじゃないの？」

そこまで、はつきりと言われれば否定もしづらいので、そうだと認めた。

見詰め合う二人。

まだ外で雪の降る音が聞こえた。

すると、彼女は一瞬の後に、

「もう、とつくにフラれたから」と切り捨てるような口調で言った。

それがあまりにも冷たく投げ捨てるような言い方だったので、内容よりも、その口振りに驚いてしまった。

「そうなの？」

「うん」

「いつ頃？」

「んー、忘れたけど、三ヶ月くらい前かなあ……」

それから、彼女は俺に、彼との話を話し始めた。

ある日のサークルで、飲み会に行ったらエリも俺もいなかった事。何度か告白しよう、

と思っていたけどチャンスがなかったので言えずにいた事。

その日、勇気を出して、

彼が飲み会の席を外した時に追いかけて、告白した事。

そして、断られた事。

その時から、もう三ヶ月以上経っているせいか、

終始、淡々とした調子で彼女は語った。

俺は上手い言葉が見付からなくて、黙って彼女の話聞いていた。慰めた方がいいのか、

それとも彼に対して怒った方がいいのか、よくわからなかった。

そうして、彼女は最後まで語り終えたらしい所で、黙った。

雪のせいなのか、相変わらず静かで、

部屋の上部ではエアコンが乾いた音を立てて温風を吐き出している。

「私の話は終わりだけど、俺くんの答えは、いつ聞かせてくれるのかな？」

俺が俯いていると、彼女は首を傾げながら訊いてくる。

俺は、暫く、そのままだったが、

彼女はもう一度、俺の鼻先まで顔を近付けてきて、

「私って女として見られない？」

と同じ質問をした。

それでも俺は黙って、湧いてくる色んな感情を処理し続けていたけど、

やがて決心して、さっき彼女に対して抱いた感情を順番に話し出した。

彼女に魅力がある事や、

女として見られない訳がない、という意味の事を言った。
なるべく誤解がないように、

言葉が足りないと感じたら何度でも同じ所を繰り返した。

そうして、話しながら、

これだけ彼女の魅力を語れるのに、それでも、

俺が彼女を女として見られないような理由は何だろうか？と考え続けた。

しかし、一方で俺は、それが表面的なものだと感じている。

本当は、真の理由に気付いているのに、

あえて、それに気付かない振りをして

必死で別の理由を探しているのだ。

もっと、他人が納得出来る理由。

もっと、奥底にある自分を誤魔化せる理由。

そんな理由を探しているのだ。

俺が彼女を女として見られない理由。

それは。

きっと、それは、気になる人がいるからだろう。

心の底に沈殿したように残っている面影があるからだろう。

最後に、俺は、その人の話をした。

それは、もう何年か前の出来事だったから、

まるで、どこかの倉庫に仕舞っておいて埃のかぶったような感情を、そっと取り出して披露するように……、

凍り切った情熱の塊を静かに解凍して蘇らせるように……、
ゆっくりと彼女に対して語り出した。

その人の事、その人との出会い、

俺が如何に、その人を好きだったか、その人を大事に思っていたか。
そして現在、どういう状況にあるのか。

それらを簡潔に纏めて、彼女に話し出した。

今まで誰にも、そんな話をした事はなかったけど、

そうする事が彼女に対しての礼儀のような気がした。

彼女は黙って俺の話を聞いていたが、

俺が黙ると、「それで、おしまい？」と訊いてきた。

俺は小さく頷いた。

そう言えば……この時期だったな。

彼女に話した事で、改めて古い記憶が呼び覚まされた。

まるで、自分が昔に戻ったような感じで、

あの子の存在をこれほど身近に感じたのは、

ここ最近ではなかった事だった。

「ふーん……、俺くんにも、そんな事があったんだね」

彼女は、そう言って立ち上がる。

隣のテーブルに置いてあった二人のカップを取り上げて、
すっかり冷めた御茶を淹れ直してくる。

数分間、部屋は沈黙に包まれて、

何もかもが活動を停止したみたいになった。

彼女は戻ってきて、俺の傍に二人分のカップを置くと、

また俺に寄り添うような、元の体勢に戻った。

「でもさあー」再び俺の肩に手を回してくる。

「俺くんは、その人と今も連絡、取ってるの？」

俺は否定した。

「じゃあ、何か関係が改善されるような努力をしてる？」

それにも首を振った。

「じゃあさ、冷たいようだけど、諦めた方がいいんじゃないかな？」

彼女の口調はとても優しく、

他人事ではなく、俺の中の、どこかに沁みてるような感じがした。

「ちよつと残酷だけどさ、

俺くんの言う話が本当なら、結構可愛いんでしょ？その子」

俺は、そこで初めて頷いた。

「だったら、もう次の人が見付かってるんじゃないかな。

女の人って、ただでさえ過去を振り返らない所があるから、

三ヶ月とか下手すると一ヶ月とかでも

次の人にいつちゃうって場合も普通にあると思うし……。

その上、見た目もいいなら、

例え、その彼女さんが、そういう気持ちじゃなかったとしても、

きっと周りが放っておかないと思うんだよね」

彼女の言う通りだ。

もう、それは何回も頭の中で考えてきた事だった。

ずっと、繰り返し考え続けてきた。

だから……。

『そんな事は、わかっている』と言い返したかった。

でも、一方で、

俺は誰かに、そう言って欲しかったのかもしれない、

という思いも浮かんだ。

過ぎ去ってしまった、

どうにもならない事にしがみ付いている自分を誰かに叱って欲しい。
みつともない、と蔑んで欲しい。

終わった事だと諦めさせて欲しい。

その気持ちは、彼女に言われるまで、ずっと隠されていて、その時になって初めて気付かされた自分の秘めた欲求のような気がした。

「私も最近、色々考えたけど、

一人の人に決め付ける必要なんてないんじゃないか、って思うよ。

今の私が言っても振られた女の強がりには聞こえないだろうけど、結構自分に合う人って探せば見付かるものだし、

最初は嫌っていても、会っている内に段々、

この人とは仲良くなれるかも……って思う時あるでしょ？」

彼女はカップに手を伸ばす。

そして、一口飲んだ。

「だから……どんな人が自分に合うかなんてわからない訳だし、色んな人との付き合いを広げていって

気長に自分に合う人を探していけばいいんじゃないかな」

「そうだね……」

俺も彼女に合わせて紅茶を飲んだ。

二人とも黙り込む。

俺は言いたい事を言ってしまった。

彼女も同じだろう。

そうしていると、彼女は俺を見て笑いながら言った。

「私達……、フラれた者同士だね」

その言い方が何となく面白くて、俺も微笑む。

悔しさとか惨めさとかは彼女にはなかっただろうし、俺にもなかった。

あえて言うなら、御互いの心情を吐露する事で、

一つの区切りを付けようとするみたいだな

二人の意志が、そこにあったように感じた。

「まあ……ね、仕方ない事もあるよね」

彼女は俺に伸ばした腕を畳むように巻き付ける。

そうすると、

俺との間に出来た空間が狭まって、一層、彼女の顔が近付いた。何か言うのかと思って、黙っていると、

彼女は、そのまま目を閉じて俺にキスをしてきた。

避ける間もなかった。

柔らかい唇が押し当てられる。

彼女の香が一段と強くなって、それに魅了されるような、陶然としたような気持ちになりかけた所で、

ゆっくりと唇が離れていった。

それから、口の中で小さく笑ってから、彼女は俺に囁いた。

「これで……………もう忘れようよ」

「何を？」

「御互いの相手を」

「忘れ……………られるの？」

「うん」口の端を上げる。「大丈夫。……………だって別の人と、こんな事しておいて、今更あの人を好きだ、とか言えないでしょ？」

確かに、その通りかもしれない。

納得しそうになった瞬間、ある場面が頭に浮かんだ。

「でも……………俺にしたじゃん」

「何を？」

俺は初めて彼女とキスした時の状況を話し出した。

「あの時は彼の事、好きだったんでしょ？」

「んー、あの時は、ヤケになってた時期だったから」

「何で？」

「なんか……………告白するチャンスとか勇気とかがなくてイライラしてた」

「そっか……………」

「でも、今は、あの頃とは違うし」

「そっかもね」

「だから……………俺くんも……………いいよ」

長い睫毛が伏せられた。

「何が、いいの？」

俺が訊くと、彼女はすぐに目を開いて怒ったように言う。

「だからー、私がアイツを忘れる為に、今、したでしょ？だから今度は俺くんの番だよ」

つまり、同じ事をしろ、と。

「いや、俺はいいよ……。もう忘れるとかじゃないし」

「じゃあ、その人の事、もう気にならない？」

「……うん」

それは、本当に自分の本心だったのだろうか？

今、考えても、よくわからない。

「じゃあ、余計に大丈夫じゃん」

「どうして？」

「だって、まだ気になってるならマズイけど、

何とも思っていないなら、私としても平気でしょ？」

「んー」

そうかもしれない。

御互い恋人もいなく好きな人もいないなら、

ここで俺が彼女とキスをして誰にも咎められないはずだ。理屈としては通っている。

俺は迷った末に、彼女の唇に顔を寄せてキスをした。

それは、瞬間的に触れ合う、鳥のようなキスで、

俺が離れてしまうと、彼女は露骨に不満そうな顔をした。

「そんなんで、忘れたって言えるの？」

苦笑いする俺を睨みつける。

「それとも……私とじゃ、できない？女として見れない？」
三度目だ。

もう、同じ言葉を今日だけで、三回聞いている。

もしかして、俺のこうした態度は、

彼女の自尊心を酷く傷つけているのかもしれない。

はつきりとは言わないけど、

彼女は内心、思い悩んでいるのかもしれない。

どう言葉を飾ってみても、俺が彼女の要求を拒絶する事は、女性としての彼女を否定する事に等しくなっていやしないか。そう考えて、俺は漸く決心をした。

彼女の肩を力強く掴むと、そのまま抱き寄せて、キスを返す。それは一分ほど続いて、

その間、彼女は俺にもたれかかるように身を任せていた。

俺は、ただ、彼女に意識を集中していて、重なった唇と、掴んだ両肩に垂れる髪と、彼女の香の事だけが頭の中を占めていた。

その間、

昔の女の面影は頭から消えていたな、と後から振り返って思った。

四

7

アヤの部屋でキスをした後は、

二人とも何となく吹っ切れたような、

さっぱりとしたような雰囲気になった。

例えてみれば、引越しゃ大掃除をしたような、

念頭にあつた懸念が解消されたような、そんな感じだった。

二人きりで部屋の中で、となれば、

そのまま肉体的な方向に進みがちだが、

それは、どちらの心にもなかったように思う。

そうした欲求を持つほど、

俺達の間恋愛というものは育ってなかったのではないか。

二人とも捨てきれない

己の感情を振り払うのに懸命だった、と俺は結論付けている。

頼んだピザを食べ終わって一時間もしたら

雪が小降りになってきたようなので、俺は帰り仕度をした。

アヤの部屋にいたのは、三時間程度だった。

それから、

すぐに大晦日が来て何事もなく年を越し、冬休みが終わった。

アヤからは、一度だけ、

映画に行かないか？というメールが来たが、都合がつかず断った。

エリとは会っていない。

年が明けると急に時間の流れが速くなったように感じた。

授業の始まった大学は、すぐに後期試験を迎えた。

単位に関して、俺は殆ど問題なかったから、卒業を待っただけだった。

卒業式が近付くと、

周りは最後の学生生活を惜しむような盛り上がりを見せた。
必要以上に浮き足立って、

飲み会や打ち上げという名の誘いが来た。

俺は同じ学部の人やゼミの飲み会を優先させて、
サークルの飲み会には行かなかった。

この頃は授業もなかったし、春から仕事に就く為の準備があつて、
自分が学生なのか社会人なのか認識しづらい立場だった。

春になった。

いつの間にか卒業していて、いつの間にか社会人になっていた。
四月から六月の三ヶ月間の記憶は、殆どない。

あの頃は何をしていたのだろうか。

覚えていない。

思い返そうとしても思い出せない。

不思議だ。

残っているのは、ほんの断片的な記憶だけで、
それを、どう繋ぎ合わせても

当時の自分を再生出来そうには思えなかった。

職場と家を往復して、仕事に慣れる事で精一杯だったし、
もしかしたら、毎日、同じ事を繰り返していたせいで、

記憶が圧縮されているのかもしれない。

仕事を始めた事で、自分の行動範囲が変化した。

職場と大学は方向が全く違っていたから

住んでいる場所は変わらないのに、

それまで会っていた人に会わなくなったし、

行った事のない場所に行くようになった。

エリにもアヤにも会っていない。

それどころか、大学時代の知り合いとは誰とも会わなかった。

ある日の仕事帰り。

夕食を摂ろうと立ち寄った店で、

大学時代のバイト仲間と偶然再会した。

彼も社会人になっていて、

懐かしい思い出話をしながら連絡先を交換した。

近況を語り合うと、互いを励ましあうような言葉を交わした。

「また会おう」

彼は別れ際に笑顔で言った。

新しい仕事。

新しい人間関係。

自分を取り巻くものが急激に変化していく。

そんな生活環境や交友範囲の変化は寂しくもあり嬉しくもあった。

新人研修が終わり、夏を迎える頃には、

俺の中に多少の余裕が生まれるようになった。

相変わらず忙しい毎日だったけど、

おそらく、体の方が慣れてきたのだろう。

七月下旬。

エリからメールが来た。

話したい事があるので、少し時間を作ってほしい、という内容だった。

何度か連絡を取り、約束の日を決めた。

八月に入ったばかりの土曜日は半袖でも足りないくらいの暑さで、陽が落ちても、そこら中に熱気が満ちていた。

エリとの約束の五分前に待ち合わせ場所に着くと、

彼女は既に来て、俺を待っていた。

彼女と会うのは、もう半年振りで、

メールなどの遣り取りはあったから全くの音信不通でもなかったけれど、

こうして面と向かうと半年という時間の経過を思い知らされた。

エリの短かった髪は、

肩にまで届くくらいになっていて、それを縛って纏めている。

最近になって使い出したのか、

縁の細い赤い眼鏡が彼女をとて知的に見せていた。

飾り気のないノースリーブにジーンズという格好だったのに

女らしい色気を感じる。

待ち合わせたのは彼女の大学に近い場所で、

そこから歩いてすぐのレストラン兼バーみたいな店に入った。

そこは、

昔のアメリカ西部地方みたいなのをイメージしているのだろうか。

内装や店内の小物にも、そういう雰囲気を感じられた。

席に着くと、

近況報告のような世間話のような愚痴のような会話が暫く続いた。

彼女は大学院に入ってから、昔以上に忙しくなったみたいで、

今日の予定は彼女の都合に合わせて計画されたものだった。

会話が一通り済んでしまうと、エリはアヤの話を持ち出した。

「俺くんって、最近アヤに会ってる？」

「いや、何となく忙しくて会ってないね」

「連絡は取ってるの？」

「たまにメールが来るくらいだけど……どうして？」

「んー……」

彼女はグラスを両手で包むようにして、その中を見詰めている

何となく言い難そうな様子だ。

俺は、先を促した。

「なんか……最近、元気がないみたいなんだよね……」

彼女が言うには、アヤと連絡をとっても、今ひとつ元気がない。

最初は仕事がキツイのか、とか悩みでもあるのか、とか色々考えていたけど、どうもはつきりした事はわからない。良かったら俺が様子を窺うなり、

遊びに誘うなりしてあげてほしい、という事だった。

俺は、それに反対するような疑問を投げかけた。

「俺が誘っても効果ないんじゃないの？」

「そんな事ない」

「だって、仕事が上手いじゃない……」

とかって話なら俺にはどうする事も出来ないよ。

他にも、んー……例えばアヤちゃんに何か悩みがあったとして、さ。

俺が何かして、どうこうなる問題じゃないと思うんだけどなあ……」

俺は考えた。

おそらく、

アヤも環境の変化に戸惑っているだけではないのだろうか。

きっと、

職場の人間関係や風習に驚いたり、当惑したり、悩んだりしながら、懸命に自分を適応させようとしているのではないだろうか。

俺と同じように。

女性の方が、些細な事に敏感でうるさい人間が多い、と聞く。

そういう人が周りに多いのではないか。

きつと、職場に溶け込もうとする毎日に、神経をすり減らし、

エリの誘いを受け入れる余力が残っていないだけではないのか。

勝手な想像だったが、俺はアヤの状態を、そう判断した。

アヤも俺も似たような状況なのだろう、と。

俺だって大学の友達には会っていない。

今日だってエリから誘われなければ、自分からエリに声を掛けて、食事でも行かないか、なんて誘う事はしなかっただろう。

そこまでの余裕はない。

しかし、その点、エリは違う。

彼女は自分の通う大学の院生になった。

通学場所も変わらない。
専攻内容も変わらない。

多少の変化はあるだろうが、
俺やアヤが体感しているような変化とは雲泥の差なのではないか、
と思っている。

だから、エリの話を聞いてもアヤに味方をしたい気になった。
すると、彼女は意外な話を始めた。

「前にさ……去年の年末かな。

ほら、三人で食事に行こうって話が私の用事で
キャンセルになった時があったでしょう？」

忘れるはずがない。

あの雪の日だ。

「私の用事が終わらなくて、やっと全部片付いて、
時計を見ると十時近かったのかな。

それで、一応アヤに電話をしたのよ。

ごめん、今、終わったって。今日はホントにゴメンって。

……そうしたら、あの子、別にいいよって言うてくれて。

後になって、会った時に、もう一度、その話をしたの」

それは初耳だった。

俺は手元のグラスを握り締めて、彼女の話に耳を傾ける。

「アヤは全然気にしてなくて、

でも私、あの子が、その日を楽しみにしていたのを知っていたから、
気にしてないはずはないなって思っ

て、もしかしたら、俺くんと、いい感じになったのかな、とか思ったり
したの」

俺は、その発言に面食らったが、続きを促した。

「アヤは、色々考えてた事があったけど、

俺くんに話してスッキリしたって言っ

てた。
少し救われた、というか、慰められた、
というか、
そんな意味の話をしてたよ。

俺くんが何て言ってアヤを励ましたのか知らないけどさ、
あの子にとっては俺くんの存在って大きいんじゃないかな。だから
……」

彼女の瞳が揺らいだように見えた。
頬は紅潮している。

「だから……きっと、私には言えなくても、
俺くんが訊けば話してくれる事もあるって思うんだよね。
ちょっと悔しいけど……」

彼女は、そこで言葉を切って
目の前のグラスを取り上げて口をつける。
ジントニクだったか。

透明な液体が少しずつ減っていく。
俺も、それに倣って自分のグラスを口に運んだ。
(悔しい?)

最後の言葉の意味はわからないが、
昔から仲の良いエリよりも俺の方に心を開いている部分がある事に
彼女は不満があるのだろう、と解釈した。

それから彼女は、こんな話をした。
「あの子って大学入った頃から見ているけど、
ちょっと変わった子でさ……」

(ちょっと、か?)
俺は言いかけた冗談を仕舞いこむ。

「何て言うか、
悪く言うとう自分勝手っていうかマイペースって言うかさ、
天然って言うか、とにかく、そんな感じなんだよね。」

友達同士で食事をしようって時に、
『どこの店に入ろうか?』ってなるじゃない。
そういう時に一人だけ『あそこがいい』って
皆の希望とは全然違う店を主張したり、
グループで研究テーマを決める時でも

『これがしたい』って譲らなかつたりしてね。

で、女の子って、そういうのを嫌うからさ、

一年もしない内に自然と学科で孤立しちゃってね。

外見は可愛いから男は寄って来るんだけど、

でも彼女の性格を見ちゃうと『我儘』って映っちゃうみたいでさ、
なかなか長くは続かなくて……」

彼女の話は、俺の知らないアヤの姿を浮かび上がらせてきて、
俺は自分の中の『アヤ』という存在を再考しなければならなくなっ
た。

「でも、私は、

あの子の、そういう、はつきりした所が好きだったから
付き合いやすいつて思ってたんだけど、
他に、そう思ってくれる子はいなくて。

私は私で仲の良い子がいたから、アヤに紹介したりするんだけど、
どの子も、『嫌だ』とまでは言わないんだけど、

アヤとは合わせづらいから、

友達としては、ちょっと……って言われたりして。

アヤの方にも、もう少し周りに歩み寄りなよ、とか言っただけど、

『私はこれでいい』って言われちゃうと、もうどうしようも出来な
くてね」

彼女の表情に悲しげな色が宿る。

「で、そういう時に、あのサークルの話を聞いてさ、

試しに参加してみようってなったんだよね。冷やかし半分で、

でも、行ってみたら思った以上に居心地が良くて、

二人で『いい所だね』なんて言ってさ。

俺くんもわかると思うけど、

決まりとかもないから自由だし束縛もないから、

アヤも大学で感じるような窮屈さは感じなかったんじゃないかな。

あそこにいる人は初対面でも気楽に話せたからね」

それは、俺も良くわかる。

彼女の語ったサークル評は、

正に俺が、あのサークルに対して感じていたままで、

彼女が自分と同じような思いを抱いているのを知って、
更に親近感が増したように感じた。

今になって思うが、あのサークルの常連は変わった人間が多かった。

若い男女が集まっているのに、

会話の内容は研究関係や趣味的な話題が多くて

恋愛の割合は極端に少なかった。

時々、恋愛志向の強い人間が参加してくる事もあったが、

そういうものを第一に求めている人は次第になくなったものだ。

元々、恋愛的な出会いを求めていなかった自分は、

その雰囲気を楽ししいものと思っていたので何度も参加したし、

参加者達の互いを必要以上に干渉しない姿勢も

居心地の良さを演出させるのに役立っていたように思う。

振り返ってみても、

俺は、あの会に参加して、あの場で必要以上に

自分のプライベートな部分について訊かれた事はなかったし、

不快な思いをした事もなかった。

「その内、誰かは教えてくれなかったけど、

アヤから好きな人が出来たって言われた時は、

あー……この子も、なんか変わってきたなあって思ってたんだけど、

俺くんに送ってもらったりして、他人に迷惑かけたりするような所は
変わってないなあなんて思ったり……」

「言うほど迷惑でもなかったよ」

俺は昔を懐かしむ。

思い返せば、腹を立てるような事ではなかった。

今では、いい思い出だ。

「そう言ってくれると私も助かる。

きつと、あの子も、俺くんが怒らないし迷惑そうじゃなかったから、
頼ったり出来たんだと思うんだ。」

だから、そういう意味でも俺くんには心を許してるんじゃないかな」

「それは言い過ぎだよ」

「そうかな？」

「そうだよ」

「私は違うと思うけどな。」

あの子にとっては、俺くんって一番の男友達だと思うよ」

「そうかなあ……」

「うん、きっと、そう。だから、もし忙しくなくて俺くんが嫌じゃなければ、

話し相手とかになってあげて欲しいんだ」

「わかった」

俺は彼女の要望を受け入れて、

なるべくアヤと連絡を取っていくようにしようと決心した。

俺とアヤの家は駅で二つ離れている上に、

職場も逆方面だから帰りに待ち合わせる、というのも難しい。

その上、休みや生活時間も合わない事が多いから、

会えたとしても、きつと短い時間だろう。

ゆっくりした時間を取ろうとすれば、

連休とか夏休み、年末年始とかに限られるのではないか。

しかし、メールをする回数くらいは増やせるだろう。

とにかく、様々な問題点はあるが、

アヤとの接点を意識的に増やしていこう、と思い始めたのは、

エリと会った、その時からなのは確かだった。

エリから話を聞いた後は、

不自然でないようにアヤへのメールの回数を増やし始めた。

最初は、「何してる？」とか「最近どう？」みたいな

軽い感じのものや自分の近況を報告するようなメールを送った。彼女も俺に呼応するように返事をしてくるようになる、次第に遣り取りが増えていった。

その結果、

エリと会ってから一週間後の盆休みに二人で会う事になった。

帰省で閑散とした駅ビルの中にあるレストランで昼食を共にする。

そこは、アヤの家に近い駅で、

ちょうど年末に三人で食事をしようとした場所の辺りだった。

待ち合わせたビルの前で、

暇そうな受付嬢をガラス越しに眺めながら立っていると、

向こうから見慣れた姿のアヤがやって来た。

ノースリーブにスカート、短いヒールを履いている。

夏らしい、女らしい格好だ。

それは、去年の夏も見ていた彼女の姿で、

一年経っても変わらないな、という印象を受けた。

「お待たせ」

彼女は、そう言って、軽く片手を上げた。

俺達は中に入って、エレベーターで上がっていく。

目的の階に到着すると、洋食の店を選んだ。

店内は、外と同じく空いていて、窓際の席に座る事が出来た。

良く晴れて、青い空を埋め尽くすように雲が広がっている。

表の景色を眺めながら、ぽつりぽつりと思い付いた事を話し出す。

年が明けてから、ちゃんと彼女に会うのは初めてだ。

卒業までは、

何度か機会がない訳ではなかったが、会わずに今に至る。

何となく都合が合わなくて会いそびれていた印象があった。

それでも、隔絶の感じがしないのは、メールの御蔭か。

細かい事はわからなくても

大まかな事情なら理解しているような気がする。

話し始めると、益々昔に戻ったような気になった。

明るい声や、笑い方、口振り、仕草、

どれを取っても、俺の知っているアヤのままだ。

悩んでいるような素振りも見えない。

ただ、話し振りから少し仕事に疲れているようにも感じられた。

俺は、あまりに自然にアヤとの会話に入っていけたので驚いた。
もう少しこちなさがあるかと予想していたからだ。

そして、暫くすると、

どこかに彼女の変化した部分を探し出してやろうという

意地悪にも似た気持ちが湧いてきて、

長時間の探索の末、漸く、化粧の仕方が大人っぽくなった、
などという微小な発見をして嬉しくなった。

それは目元を強く見せるようなメイクだった。

改めて、見直してみると、

より彼女の眼差しが強調されているようで、

ただでさえ目立つ部分が一層引き立って

吸い寄せられるような気持ちになった。

彼女は、よく笑って、よく食べた。

俺も同じようにした。

それから一時間ほど過ごして、エレベーターに乗った。

下の階で、洋服や雑貨を見ながら他愛もない雑談を繰り返す。

夕方には彼女と別れた。

予想通り、何か収穫を得られた、という感覚はなかった。

エリに話した通り、これで何かが変わるような感じもなかったし、
アヤも俺との事を特別喜んでいるような様子にも見えなかった。

極普通の友達同士の食事だ。

傍から見ても、そう見えるだろう。

しかし、これでエリが満足するなら、

それでいいのかもしれない、と自分を納得させた。

俺からのメール回数が増えたせいか

盆の食事のせいかわからないが、

秋にかけてアヤとのメールの遣り取りは頻繁になった。

俺は、その中で、

何か話したい事があつたら、いつでも聞くから、というような
ニュアンスを織り交ぜながら気長にアヤの様子を窺っていた。

だけど、メールを繰り返すだけで、

あれからアヤに会う機会は一度もなかった。

そうして二ヶ月が過ぎた。

秋が終わり、冬が始まるうとしている。

俺は仕事に大分慣れてきた。

付き合いつらい人がいたり、

人間関係は必ずしも良好とは言えなかったが、
仕事が落ち着いてきた事もあって

毎日を無難に過ごせるようになってきた。

アヤも俺と同じように仕事に慣れてきたのか、
吹っ切れたような様子のメールが増えた。

その頃、俺に重大な変化があつた。

春先に再会した学生時代の友人がきっかけで、
ある女性と会う事になった。

それがアヤに話した人だ。

彼女から連絡が来たのは数年振りで、
最初にメールが届いた時は随分驚かされた。

それから、

何度かメールや電話の遣り取りをして直接会う約束を交わした。
連絡を取り始めた当初は、

近況報告などの遣り取りでしかなかったが、

暫くすると彼女の方から会いたい、と言ってきた。

数年振りに会うという事に、

俺の中で若干の抵抗があったものの

最終的には好奇心の方が勝った。

彼女は、どうなっているのだろう。

俺は、彼女にどう映るだろう。

そんな経緯があったので、

最初に彼女からメールが届いてから

会うまでに一ヶ月近く時間がかかってしまった。

待ち合わせ場所は、

彼女の指定に従って俺の家から少し離れた駅になった。

そこは、暫く行っていない方面だったが、

以前住んでいた場所に近く

土地勘がある事もあり問題なく辿り着けた。

俺は約束の時間より大分早く着いて彼女を待った。

待っている間、俺を支配していたのは複雑な感情で、

時折、やはり来るべきじゃなかったんじゃないか、という後悔に近い念と、

逃げ出したいような気持ちと、それから彼女がどうなっているだろう、

という期待に似た気持ちと様々だった。

待ち合わせの十分前に、彼女はやって来た。

髪は少し伸びていたが、

俺の記憶と変わらないその姿に、

何故か温かいものが込み上げてくる。

俺は咄嗟に目を擦った。

彼女の姿だけではなく、色々なものが俺の神経を刺激する。

太陽や風や街並み。

見るものの全てが、あの頃と同じだった。
夢のような、幻想のような、情景。

既に俺が待っている事に彼女は驚いていた。
最初に交わした言葉は覚えていない。

どちらからともなく話し出して、

そこから少し歩いた場所にあるファミレスに入った。

食事をしながら、御互い語り合う。

俺の話す内容の多くは謝罪に近い意味の言葉ばかりだった。
彼女は笑って、それを許してくれた。

ガラス越しに外を眺めると、

同じパンフレットを持った人達が行き交っている。

どうやら映画のパンフレットのようなのだ。

土曜だから何か新作が公開されたのだろう。

そう言えば、近くに映画館があったな。

その日は、

これまで送り合ったメールの内容をなぞるような話をした。
既に知っている内容ばかりだったが、

文章ではなく直接話をする事に意義があるように思われた。

途中まで彼女を送って、別れた。

帰り道は、とても晴れやかな気分で、

家を出た時のような重苦しい気持ちは微塵もなかった。

その心境の変化を、

我ながら何て勝手なんだろう、と胸の内で苦笑した。

師走に入ると、アヤに会うより彼女と会う機会の方が増えた。

アヤとは、全く連絡を取らない訳ではなかったが、

彼女と比べるとメールの量も電話の回数も比較にならなかった。

俺は時間が取れない事が多かったが、

彼女は俺よりも時間的に余裕があったので、

俺の都合に合わせてくれた。

俺達には、空白があった。

だから、一緒にいる時間と交わした言葉で、その空白を一所懸命に埋めようとした。

毎日、連絡を取った。

電話はするし、出来なければ最低でもメールは送った。

その内容は次第に濃いものになっていく。

会えば、短い時間でも話し込んで、

街中で歩く時には手を繋ぐようになった。

二人の間の溝は、いつしか埋まってなくなっていた。

俺達は恋人同士として交際を始めた。

それから二、三週間が過ぎて冷静になってくると、

不意にアヤの事が頭に浮かんできた。

彼女との事に浮かれてアヤの事を考える余裕がなかったが、

アヤは今の俺を見て、どう思うだろう？という思いに囚われ始めた。

その度に思い出すのは、あの雪の日だった。

ちょうど一年前の今頃だったのが、余計に生々しく思い出させる。

去年の、あの雪の日にアヤと交わした約束は何だったのだろうか？

二人で、過去の亡霊を振り払ったのではなかったのか？

そうして、新しい未来の自分に思いを馳せよう、

と話したのではなかったのか？

そう思わないではいけない。

そんな風に考えると、

アヤが今の俺の状態を知っても、きっと喜ばないだろうと思うし、

エリも同じように考えても不思議はない気になった。

誰かが悪い訳ではないのかもしれないが、

何となく俺だけが抜け駆けをしたような気になって、

それから、彼女といってもアヤやエリの顔が突然、頭に浮かんでくるようになった。

そうして思い悩んでいる内に、年が押し迫ってきた。

俺は、いつか機会を見て、アヤとエリに

俺達の事を話さないといけないな、と漠然と考え始めた。

具体的な方法は思い付かなかったが、

年が明けたら、折を見てアヤを呼び出そうと思っていた。

それとも、それより前にエリと話をして、

アヤに、どう話したら良いか相談しようか、とも考えていた。

年が明けた。

初詣は彼女と二人で行った。

電車で三十分くらい行った所にある神社だ。

元日の昼間に出かけたが、晴天のせいかな、かなりの人手だった。

開けた場所にある神社なのだが、

参道は人で溢れ、押されながら、

どうにか参拝を済ませた時には御互い疲れ切っていた。

帰り道、人の流れの少ない場所ですぐ止まった。

運良く座れるような場所が見つかったので、並んで腰掛ける。

俺は、隣にいる彼女を気遣った。

「疲れたね」

「……うん」

彼女は少し疲れているように見えた。

「大丈夫？」

「平気」

「疲れたら言ってね」

「……ありがとう」

「あ、何か飲み物でも買ってこようか？」

俺は立ち上がって、

近くの自動販売機で温かい飲み物を買った。

二人並んで、それを口にした。

「あつたかい」

「少し落ち着いた？」

「うん」

「人が多くて歩きにくいから疲れるんだよ」

「そうかもね」

「もつと空いてる神社に行けば良かったね。ごめん」

「確かに、ちよつと疲れたけど……楽しいからいい」

「そう？」

「うん。暫く座っていれば元気になるよ」

俺達は、そのまま十分ほど座って

ぼんやりと道行く人を眺めながら話をしていた。

俺は、彼女が無理しているんじゃないだろうかと心配したが、

彼女は、それを否定した。

「こんなに人がいるって思わなかったから、

ちよつと疲れたけど平気。」

……それよりも去年の今頃は、

俺さんと、こうしてるなんて思ってたから、

……なんか不思議な気がする」

駅までの帰り道は、広い通りが中央で区切られていて、

参拝に向かう人と帰る人の流れを綺麗に分断していた。

俺達は帰る人の流れに乗って歩き始める。

二、三列程度に広がって駅に戻る人の流れのすぐ隣を、

神社に向かう人達が同じように広がって歩いていく。

道は広く、見通しはいい。

俺達は駅に向かっていたので、

これから神社に向かう人達が良く見える。

すると、遠くの方で知った顔を発見した。

その神社は、

場所柄、地元の間人が足を運ぶ割合が高かったから、過去に何度か知り合いに会う事も少なくなかったが、その時ばかりは心臓が縮む思いがした。

彼女に悟られないように何度か遠目に確認してみたが、何回見ても、それはアヤに間違いなかった。

視界に入った瞬間から、その服装や髪型に見覚えがあった上に、隣にいるのがエリだと気付いた時には人違いではないと確信した。俺は、その時、反射的に隠れそうになった自分を恥じた。

しかし、このまま彼女と一緒に

エリ達の前に顔を出す心構えは出来ていなかった。

彼女の手を解いて他人の振りをする訳にもいかない。

俺は、なるべく彼女達に遠い位置を歩くように左側へ寄った。

彼女を強引に押すような形になってしまったが、

彼女は俺に押されるままに流されて行く。

彼女は背が低いので、

こうして遠くに押しやって俺が壁のようになれば、

アヤ達の目に留まる可能性は低いだろう。

そうして、

俺は俯き加減に歩いて、その場を遣り過ごそうとした。

エリとアヤは談笑しながら、やってくる。

混雑している為、道の流れは、ゆっくりだったから

何かの拍子に同じ方向けば簡単に見付かりそうだった。

周りには他にも大勢の人がいたが、

俺は二人にだけ意識がいつていたので、

まるで群衆の中から二人の会話や仕草だけは

違う周波数で俺に届いてくるような感じがする。

同じように、俺が少しでも声を立てれば、

簡単にアヤ達に聞き取られそうなのがして声を潜めていた。

心持、左を向きながら

右半身は針のようになってアヤ達を警戒する。

（どうか、この場は見付かりませんように）

そう願いながら、下を見て歩く。

その甲斐あってか、

どうにか気付かれずに擦れ違ふ事が出来た。

俺は安堵して小さく肩を落としたが、

彼女は、それに気付く事なく鼻唄を歌いながら

繋いだ手をブラブラと揺すっていた。

初詣の件があつてから、

彼女の事を二人に話さないといけない、

という思いは俺の中で急速に大きくなっていった。

だからと言って、

どこから切り出せば穏やかに済むのか、いい考えは浮かばなかった。

どう話しても無事に済みそうにない予感がする。

俺があらのままを話せば、きっと、

アヤは雪の日の事を思い出して沈んだ感じになるのではないか。

最近のメールなどから判断すると

現在アヤには彼氏がいないようだし、

昔の男を忘れて建設的に生きようとしている所へ、

同じように話し合った友人が、

全く逆に過去の女と結ばれていたら一体何と思うだろうか、

取り残された感じがしないだろうか、などと考え始めると、

気が重くなつて一向に連絡を取ろうという踏ん切りがつかなかった。

決して悪い事をしている訳ではない。

誰にも後ろ指を指される覚えもなかった。

それでも、一方で、どこか、あの日の二人に対して

申し訳ないような気持ちにならざるを得ない自分がある事も確かだった。

帰宅途中は、大抵アヤの事を考える。そうして、二週間が過ぎてしまった。相変わらず、どう連絡を取ろうかと、と算段している所へ俺の携帯が鳴った。画面を見ると、アヤからのメールで、内容は至ってシンプルなものだった。『会って話したい事がある』

終

9

アヤからのメールを見た時に何故か直感的に、話す時が来たのだ、という気がした。

例え、アヤの話がどういった内容であろうとも、

その場で彼女の話を打ち明けようと、その時、覚悟を決めた。

返信をして、何度か遣り取りをすると、

今月下旬の土曜に約束が決まった。

彼女には、前もって予定が入った事を伝えておいた。

約束の日は、すぐに来た。

待ち合わせは、

アヤの家に近い駅で、盆休みに二人で会った場所だった。

その日は風が強く、正午でも充分寒かったのに、

陽が傾きかけた今では更に気温が下がっていた。

アヤは、この寒いのにミニのタイトスカートを穿いている。

厚手のスパッツを穿いてはいるが、寒くないのだろうか。

ブーツのせいで普段よりも背が高く見える。

上着はコートのせいでわからない。

顔を合わせると、

アヤは当然のように、以前と同じ店に入っていた。

前回、来た時には気付かなかったが、

その店は時間帯によってメニューが違うようだ。

昼間は洋食屋だが、夜にはバーみたいに酒を出しているらしい。

夏に来た時はランチタイムだった、という事だろう。

ウェイターが運んで来たメニューには見覚えのない名前が並んでい

る。

店内の照明は控え目で落ち着いた雰囲気醸し出して、以前来た時とは様子が全く違っていた。

夕食には少し時間が早いせいか、

あまり混雑していなかったので今日も窓際の席に座る事が出来た。

暮れゆく街並のあちこちで

電気が点き始めるのが窓越しに見える。

既に街灯も灯っていて幻想的な風景だ。

注文を済ませると俺達は黙り込んでしまった。

元々アヤから誘われたので、

向こうが話し出すまで俺は待つ事にした。

飲み物が来るまでは、とても長く感じた。

ずっと黙っている訳にもいかないので、俺は天気や体調など、

当たり障りのない話題を持ち出して、何とか時間を潰していた。

上辺の遣り取りが何度か続いた頃、漸く酒が運ばれてくる。

二人ともビールの中ジョッキ。

グラスを合わせて乾杯をする。

飲み始めて、順々に、つまみが運ばれてくる頃になると、

俺は我慢出来なくなつてアヤに今日の用件を問い質した。

「今日はどうしたの？」

「……うん……」

「何か話があつたんじゃないの？」

俺は重ねて訊く。

彼女は俯いてテーブルの一点を見ながら

何度もグラスを口に運んでいた。

俺は、その様子を見詰める。

伏し目がちに瞬く睫毛と張りのある頬と、

それから胸元から覗く鎖骨を順番に見た。

今日も髪を巻いている。

全体が波打ち複雑な模様を描いていて、それが彼女の心境を表しているような気がした。

「あのさ……」

アヤは、漸く語り出す。

「俺くん、私に言う事ない？」

「言う事って？」

今日の彼女の態度や雰囲気から、何の事であるか想像はついていたのに、最後の望みをかけて万が一違ったらいいな、という思いで、そう訊き返した。

「私……見ちゃったんだよね」

「……何を？」

「初詣、で」

アヤは俺を上目遣いに見た。

俺は、やはりアヤに見られていたのだ、と悟った。考えてみれば、幾ら周りに人が大勢いるからって、ほんの何メートルか近くを顔見知りが通り過ぎているのだ。よほど余所見をしない限り、

僅かでも視界に入れば見付かる確率が高いはずだった。

あの時だって、可能性は五分五分だと思っていたし、

アヤじゃなくてもエリが気付けば同じ結果になるだろう。

そんな事を考えながら相手を見詰める。

向こうも俺を見詰め返していた。

その瞳が暗い照明を鈍く反射して妖しく光る。

それから俺は観念したように、全てをアヤに話し出した。元々、会っ前から決心していたので、

自分の想像以上に上手く順序立てて説明する事が出来た。

最初、彼女について言及すると、アヤは、とても驚いた顔をした。

しかし、それは一瞬で消えて、すぐ俺に続きを促してくる。それから、

去年の秋頃から俺が感じた事や、してきた事を話していく。アヤは、時々頷きながら俺の話に聞き入っていた。

「……って、感じ」

全部を話し終わると肩の荷が下りたように溜息をつく。知らない内に緊張していたみたいだ。

肩に力が入っているのがわかる。

アヤは、「そう」とだけ言った。

俺は、アヤの反応が怖かった。

何と言われるだろう？

冷静に考えれば、

アヤが俺に対して何か否定的な事を言うはずはない。

非難する立場にもないし文句を言うのも可笑しい。

ただ、俺からすれば、

あの雪の日の事を持ち出されるのだけは心苦しい思いがした。

アヤに、どう話そうかと考えている時も、

彼女との馴れ初めを語るのは簡単だったが、

その事だけでは満足のいく説明を思い付かなかった。

どう言えば、あの時の俺の状態を説明出来るだろうか。

そればかり考えていた。

しかし、それは杞憂だった。

アヤは、あの日に関しては一言も触れてこない。

ただ、付き合い始めのカップルに訊くような、

どれくらい会っているのか、とかデートはどこに行くのか、

とか当たり障りのない質問ばかりをしてきた。

それも活発な遣り取りではなく、

ぼつぼつと言葉を置いていくような会話だったから話の展開が遅い。

どうも彼女は塞ぎこんでいる様子で、俺の話を聞きながらも頭の隅では別の事を考えているような感じだった。

それで俺は、

アヤの問いに答えながら、その理由を探ろうとした。

俺と会った時には、アヤは、もう少し明るい態度であった。
どちらかと言うと、

俺に探りを入れて初詣に連れていた彼女の事を訊き出そう
というような姿勢が見られた。

それが、彼女について話し出してから、アヤの様子が変わった。
口数も減ったし、俺の方を見ない。

俺は、

考えても思い当たる理由が見付からなくて、直截アヤに訊いた。

「どうした？」

「何が？」

「元氣ないね」

「うん……」

「俺、マズイ事、言ったかな」

「ううん、違うの」

「じゃあ、何？」

アヤの指がグラスに伸びる。

テーブルの上だけが照度が高い。

その爪先が照らし出されると、口紅と同じ桃色なのに気付く。

店内は控え目な音楽が流れていて、それが俺の耳に届いてきた。
ジャズだろうか。

軽やかなピアノの音色が響く。

「私さ……悪い事、言っちゃったね……」

アヤの声は消えそうに小さい。

耳を凝らして、その先を待った。

「前にさ……」

女の方は待つてないとか、知った風な事、言っちゃって……」

「何の話？」

俺が問うと、アヤは、あの雪の日に自分が話した事を繰り返した。

「そんな事、言った？」

あの日に関して、俺の記憶は偏っている。

その殆どは、言葉にすれば、アヤとのキスと、彼女を忘却する方法と、未来への希望、

というようなものになるだろうか。

とにかく、そういったもので占められていて、

アヤが、今、持ち出してきた話の多くを俺は忘れていた。
黙って俯くアヤ。

「恥ずかしいよね、私。」

偉そうにアドバイスみたいな事、言っておいて……これじゃあさ、
なんか俺くんの恋愛を邪魔してるみたいじゃない？」

俺は、慰めに聞こえないように注意して、その言葉を否定した。
その時になって、俺は初めて知った。

アヤにとっては、

あの雪の日の位置付けが、俺とは変わってきているのだ、と。

最初、俺にとつての雪の日は、アヤとの結束の日で、

言わば同じ目標に向かって共闘を誓った、そんな日だった。

だが、俺には彼女が出来た。

俺とアヤは付き合っている訳じゃないから、

別に恋人が出来たって構わない。

構わないのだが、その相手が、

あの時、アヤに語った女では話が違ってくる。

あの時の御前は何だったのか、と問われれば返す言葉もない。

だから、俺はアヤを裏切っているような気がしたし、

出来るなら、あの日の事に関しては触れて欲しくなかった。

その話を出されれば、俺は完全に敗者で、アヤは勝者だった。
そう思っていた。

しかし、俺が考えるようにアヤは考えていなかった。

アヤから見ると、あの日の自分の言動は、

結果的にではあるが、俺に足枷を掛けて、

本来ならとつくに結ばれていたかもしれない二人の将来を妨害するような形になってしまった、と感じられるようだから、アヤも、あの日については触れて欲しくない。そつという思いが湧いてきたみたいだ。

もし、俺が付き合っている彼女が、別の誰かだったなら、きつとアヤは祝いの言葉を並べてくれたのだろう。

アヤは、頻りに、

あの日の自分の言動を後悔するような台詞を吐いた。

俺は多少、大袈裟なくらいの言葉で慰めた。

自分が非難されるような事態ばかりを想像していたから、こつした場面になるとは思ってもよらなかった。

「ホントに、ごめんなさい」

何度目かの遣り取りで、

大分落ち着いたアヤは、最後に、そう言つて頭を下げた。

「もういいつて」

「だつて……」

「別に、アヤちゃんが何も言わなかったとしても、俺達がもつと早く付き合っているとは限らないし」

「そうだけど……」

俺は、もう店を出ようとした。

このままでは堂々巡りだ。

いつまで経つても話が終わらない気がした。

アヤを促すと、彼女は素直に従った。

結局、アヤの用件は何だったのかわからなかったが、

このまま話し合いを続けていっても同じ事の繰り返しで、きつと好ましい結果を迎えないだろうから、

日を改めよう、と判断した。

店を出て、アヤを家まで送つて行く事にした。

彼女は、それを拒んだが、

夜も更けているし駅からの道は暗い所もあるので
反対を押し切って勝手について行った。

夜道は、とても静かで、こんな時間に、
こうして、この道を歩いていると、あの頃の事を思い出した。
空気は澄んでいて、星がよく見える。

月は見えない。
新月だろうか。

「この道、よく通ったね」
隣のアヤに声を掛ける。

「そうだね……」

俺の言葉に小さく頷いた、
その時、彼女の香が冷たい風に乗って届いてきた。
吐く息が白い。

「なんか……懐かしいよね」

俺は努めて明るく言った。

頭の中には、アヤやエリの事、サークルの事、

大学の事……色んな事が浮かんでいた。

どれも懐かしくて、過ぎ去ったものばかりだけれど、

それらを思い出す事は決して後ろ向きな感傷からではなかった。

アヤは、それには答えず、黙って隣で歩調を揃えている。

二人の足音だけが空に響く。

考えてみれば、

アヤは、この道を毎日のように通っているのだろうか、
懐かしさなんて感じているのは俺だけなんだろう。

頭の中で何か他の話題を探している内に

彼女の家に着いてしまった。

こんなに近かったのか。

自分の記憶の曖昧さに驚く。

「ここでもいいよ」

彼女のアパートが見える場所に着くと、アヤは俺に言った。

向こうに彼女の部屋のドアが見える。

電柱に取り付けられた街灯が

鈍い光を投げかける空間に、二人はいた。

「ああ……うん」

頷いて、立ち止まる。

俺は見送ろうとして、その場で部屋に入るように促した。

アヤは一步、アパートの方に足を向き変えて、

立ち止まると、俺の方を振り返る。

「私も……懐かしいって思ったよ」

さっきの答えだろうか。

「そうだね」

笑ってみせる。

随分、間の空いた遣り取りだ、と思った。

「この道を何回、俺くんと通ったかなあとか、

……うん、もう色々あり過ぎて言葉にし切れないくらいだよ」

「俺も、そう思う」

「でもさ……」

「うん」

「でも、もう俺くんは、あの頃の俺くんじゃないし、

私も、あの頃の私じゃないんだよね」

「どういう意味？」

「俺くんも私も学生じゃないし、同じサークルとかじゃないし……」

「そうだね」

「懐かしい……なんてさ、そんな事ばかり言ってられないよね」

彼女の言葉からは、

何故か針のような、ある種の厳しさが感じられて、

そして、それは俺の胸に強烈に響いてきた。

「私……ちょっと勘違いしてたのかもしれない」

「勘違い？」

「てゆーか、甘えてたのかも」

彼女は、その頬に手を触れる。

視線が足元に延びる二人の影を見ていた。

俺も、自然と、その先を追う。

彼女は頬杖をつくような体勢で俯いていたけれど、やがて、その手を下ろすと俺を正面から見返して、言った。吐き出した息が白く尾を引いて伸びる。

俺に届くよりも遥かに手前で、それは消えていった。

「俺くんにも……甘えていたんだよね、きつと」

その声は、とても微かな声で、

まるで自分に言い聞かせるみたいな口調だった。

その時、俺は、

その言葉がはつきりと聞こえたのに、答える言葉が見付からない。何と言ったらいいのだろう。

アヤも黙ってしまった。

それっきり二人は無言で立ち尽くす。

俺達の周囲は一切の静寂で、

他に何も活動しているものは存在しないような気になってくる。

二人の吐く息は夏の雲のように鮮やかに白い。

その連想から不意に見上げると、空は曇っていて、

あんなに綺麗だった星は見えなくなっていた。

俺にはアヤの気持ちがわからない。

一年半も付き合いがあつて何度も話して、

酒も飲んで、何となくアヤの事をわかった気になっていたけど、

こういう時になって俺は急に心細くなる。

俺の知っているアヤは、本当のアヤじゃないんじゃないか、と。だから、

こんな場合に何を言えばいいのかわからなくなってしまふのだ。何か言わなければいけない。

だけど、それが彼女の望む言葉なのか。

そうして、迷って、何も言えなくなってしまう。

アヤの気持ちを掬い上げるような、満たしてやれるような言葉。

それが必ず、あるはずだ。

そう思えば思うほど、

思考は乱れて突発的な思い付きばかりが浮かんでは消えていく。

「帰ろうか」

どれくらい、そうしていたのか、わからなかったが、

アヤが言った、その言葉がきっかけで俺達は別れた。

アヤを見ていると、

何か言わなきゃいけない事があるような気がして、

でも何も出てこなくて、いつまで経っても帰れそうになかったから、

俺は「じゃあ、また」と急ぐように言うと、

一度も後ろを振り返らないで駅に向かって歩き出した。

それからアヤには会っていない。

エリにも連絡をしていなかった。

二月に入ると、急に仕事が忙しくなってきた。

年度末の為、仕事の量が増えてくると残業も増え出して

一年目の自分には次第に余裕がなくなってきた。

職場と家の往復が続くと、

自分の事をする時間がなくなり部屋も汚くなるのに任せていた。

二週間ほどするとポストに同窓会の案内が届いていた。

送り主は、大学時代の友人だ。

彼は、俺と同じ学科で、葉書の内容を見ると、

卒業して一年が経過するので近況を語り合いましょう、

というものだった。

開催予定日は

三月下旬を予定しているので、まだ一ヶ月以上先だ。

文面の下の方に連絡先の電話番号、アドレスなどが書いてあり、今月中に御返事を戴きたい、とある。

その連絡先には見覚えがあった。

何となく微笑ましい気分になり、後で返信するつもりで葉書を仕舞う。

それから三日後の日曜日。

仕事も一旦、落ち着いて久し振りに自分の時間が出来た。

休日出勤もなく昨日も早く帰れたので、

前から溜まっていた雑事を片付けようと決意していた。

朝から掃除、洗濯をして捨てるゴミを纏めた。

昼に簡単な昼食を摂ると、午後はクリーニング屋に行き、

その後、スーパーで食材を買った。

帰宅すると、買い込んだ食材を冷蔵庫に入れる。

その頃には夕方になっていた。

予定していた用件を全て片付けると、

コーヒーを淹れ、仕舞ってあった葉書を取り出した。

参加するつもりで返事をしようと、

もう一度、じっくりと眺め、日時などを確認する。

文面は簡単な挨拶で始まって、流れるように文章が続いていく。

読んでいると、

何となく参加して皆で話し合いたくなるような、そんな文章だった。

そつのない内容だ。

書いた男の顔を思い出す。

彼らしい。

最初に見た時には気付かなかったが、

片隅に、同じ内容のものを

大学時代に使用していたアドレスにメールで送信した、と書いてある。

葉書とメールで二重に送る事によって連絡漏れを防ぐ目的らしい。そうした点も彼の人柄を思い起こさせた。

大学時代に使っていたアドレスは、今は殆ど見ていない。春からは、仕事用に与えられたアドレスを使っていたし、私的なものは携帯で済ませていた。

葉書を見て、メールの方も確認してみよう、と思った。

返事はメールでも構わない、とあるから、

そこで返事が出来るなら、それに越した事はない。

部屋にあったノートを開いて、立ち上げる。

ネットに接続してメールボックスを開いた。

一年近く開いていない割りには

届いているメールは殆どなかった。

大学関係者しか知らないアドレスだし、

元々、俺の交友範囲は広くない。

一番上に目当てのメールがあった。

それを開いて、返事を書く。

やはり内容は葉書と同じものだった。

送信して元の画面に戻る。

俺は、上から二番目のメールを見て驚いた。

同窓会メールのすぐ下にあるメールの送信者が

アヤの名前になっていたからだ。

俺は、それ以外のメールを古いものから開いていく。

どれも大した内容ではない。

今回のように葉書などで、

事前に、その内容を知らされていたメールばかりだった。

最後に一通だけ残ったメールを開く。

間違いなく、送信者はアヤで、

受信日時を見ると、食事をした日の五日後になっているから、

もう三週間近く放置していた結果になる。
動悸を抑えながら文面に目を移していく。

そのメールは、とても長くて、

最初に開いた時には画面に全部表示し切れなかった。

長さを確認しようとは画面を下に動かしていく。

かなり下まで行っても終わりが見えなかったから、一旦、諦めて、
最初にスクロールさせてから、俺は、そのメールを読み始めた。

10

俺くんへ。

言いたい事が山ほどあって、

直接会って話すと伝えきれそうにないからメールにします。

気分を悪くしたらごめんなさい。

長くなってしまっけど、

開いてくれたからには最後まで読んでくれると嬉しいな。

俺くんが、このメールを見るのは、いつ頃かな？

仕事帰りかな？

休みの日かな？

それとも、ずっと先の何年後かな？

もしかしたら、

一生読まれないのかもしれないっていう可能性もあるけど、

それでもいいかなって思いながら書いています。

一月に俺くんと、ご飯を食べようってなった時、

本当はもっと楽しい場になると思ってたんだ。

前も話したけど、

私は初詣で俺くんが彼女さんらしい人というのを見たから、

その辺を面白おかしく突っ込んでやろう、
みたいな気持ちでいたのね。

その時、私は声をかけようと思っていたんだけど、
結局スルーしちゃいました。

それは、邪魔しちゃいけないとか、そういう気持ちじゃなくて、
あとから『見たよー』って驚かした方が
面白いかなって思ったからでした。

それに私が俺くんに気付いたのも遅くて、
あつ、と思った時には、もうすれ違いそうだったって言うのもある
かな。

追いかける事もできたけど、人がスゴイだし、
別に今度でいいかって気持ちもあったから。

それに、俺くんが報告してくれるのを待って、
そこで突っ込んで面白い、とかね。

照れる俺くんに、知っていながら驚いてみせる私……とかね、
そんな様子が浮かんだりしてたよ。

でも俺くんから話してくれる感じがないから我慢できなくて、
結局、私からきくような形になっちゃったけど。

実際に会って、いろいろきいてみると、

俺くんの彼女さんが前に話してくれた人で、

俺くんを驚かすつもりが私の方が驚かされてしまって、

それで茶化すような雰囲気じゃなくなってきたし、

それ以上に私のしてきた事が

俺くんの邪魔をしてしまったんだって思い始めたら、
なんとなく暗い感じになってしまいました。

ホントは、あんな感じになるつもりじゃなかったのにゴメンね。

俺くんは『そんな事ない』って言うてくれたけど、
結果的に私が

俺くんの恋を邪魔していたのは間違いない、と思うよ。

だって、あの時、

私が『諦めちゃダメだよ』とか『もう一度ぶつかってみれば？』

みたいに言っていたら、俺くんは違う行動をとったかもしれないし、違った結果になったかもしれないんだよ。

そう考えたら罪悪感みたいなものがわいてきてね、

どうしようもないんだよね。

いてもたってもいられない、みたいな。

取り返しのつかない事した、みたいな。

本当は、邪魔するつもりなんてないのにね。ゴメンね。

なんか謝ってばかりだね、私。

でも、あの時。

あの雪の日に俺くんと話した事で

私は、ずいぶん楽になった気がするんだ。

なんとなくだけど、

一緒に頑張っていこうっていう仲間ができたって感じかな。

俺くんって、

あまり思ってる事とか感情とかを顔や態度に出さないから、

この人って恋愛とかに興味ないのかなって思ってたんだけど、

ちゃんと好きな人とかいるんじゃない、って。

悩んだりとかしてるんじゃない、って。

その時までは俺くんという人と

私だけが下らない事で悩んだり考えたりしてるのになって、

私が小さい人間なのかな、なんて思ったりしていたけど、

そうじゃないんだって思えたんだ。

みんな同じなんだ！なんて思えたりして。

ただ私が俺くんに共感できただけなのに

全人類が私の仲間とか味方みたいに感じられたんだよね。

単純だね、私。バカみたい。

私、昔からちよつと変わつてゐるみたいで、

女の子同士のグループとかに

うまく打ち解けられない時があつたんだけど、

あのサークルは、つきあいやすい人が多くて、

『なんだ、私がおかしいわけじゃなかったんだ』って

思えるようになった場所だったから、

大事にしたいなつて思つてたんだけど、

エリに、そういう話をしたら

『そういう風に大事に思つてゐるようには見えない』

なんて言われちゃつたりして。

でも、そういう風に思つてゐるからこそ、

そこにゐる人を好きになつたわけだと思ふんだ。

それは偶然じゃないと思ふよ。

あのサークルが私にとって大事だったから、

そこにゐる人を大事に思へたんだろつし。

この考えは間違つてないつて思ふんだ。

だから、あの場にゐた人は、みんな大事だし、

俺くんの事も大事だつて思つてゐるよ。

俺くんが私の事をどう思つてゐるかはわからないけど、

私は俺くんの事をホントに大切な友達だと思つてゐるから、

好きな人がいて、その人ときあつてゐるなら

幸せになつてほしいなつて思ふんだ。

それから、

俺くんと彼女さんの事を聞いて思つたんだけど、

やっぱり諦めちゃいけないよね。

今はダメかもしれないけど、

この先どうなるかわからないし、つて事、いっぱいあるよね。

俺くんは彼女さんの事を忘れてなかつたから、そうなつたわけだし、

彼女さんの事は、よくわからないけど、
きっと俺くんと同じだったんじゃないかなって思うんだ。
そういうのを聞いて、なんか勇気づけられた気がするよ。
私も、それに便乗して、

もう一度告白してみようかなって思うんだ。

前は断られたけど、

彼だって、あの頃とは違っているだろうし

私だって変わっているから、

もしかしたら違う返事が聞けるかもしれないしね。

正直に言うと、私は、まだ彼の事を吹っ切れていません。

今は仕事で忙しいから紛れている時もあるけど、

ふとした時に、どうしてるかななんて彼の事を思い出しちゃうし、

職場の歓迎会とかで

男の先輩とかに飲みに誘われたりするけど、

それを素直に受け入れられないし。

これって俺くんと同じ状態？

なんて都合のいいように考えて、

私も俺くんみたいになれるかも、

なんて最近思ったりしてるんだ。 ホント、バカ。

そう思いながらも、

ダメだった時の事も考えたりして、

そうなったら、そうなっただ、

また新しい人を見つけていけばいいと思うし、

きっと、見つかるんじゃないかな、って気がするんだ。

前は彼の事しか考えられなくて、

でもフラれたらどうしよう……

みたいな絶望的な気持ちしかなくて、

実際にフラれたんだけど、

思っていた以上の落ち込み方に自分でも驚いたりして……。

もう男の人はいいや、ってなつてたけど、
今は、もう少し違った感じにいるよ。
いつか、もう一度、彼に告白する時が来て、
それでも断られたとしても、
まあ、仕方ないか、っていう前向きな気持ちです。
これも俺くんのおかげなのかな。

だから。

私から俺くんに一つ申し込みたい事があるの。
前に何度か飲み会で飲み比べをしたけど、
今度は幸せ比べをしようよ。

あ、今、『コイツ、何、言ってるんだ？』って思ったでしょう？
それが、『イタイ女だな』とか思ってる？

まあ別に、それでもいいけどね……。

えっと、私が言いたいのはさ、

私と俺くんが次に、いつ会うかわからないけど、

今度会う時は、私は、きつと素敵な彼を連れてくるから、

俺くんも彼女さんとずっと仲良くして、

私の未来の彼が

『あんな彼女がいてウラヤマシイ』って

思うくらい幸せになつてよ、って事。

そうしたら、私も負けずに、

俺くんの彼女さんが見とれるくらいのイイ男を連れて行って、

『どう？ 私の彼は素敵でしょ？』って見せつけるから。

そうやって、お互いの恋人を自慢しあおうよ。

私、この勝負、スゴイ自信あるんだ。

だって今まで俺くんに飲み比べで負けた事ないもん。

だから、きつと、この勝負も勝つよ。

それくらい自信ある。

だから……俺くんは、俺くんが今、考えているよりも、

もつともつと彼女さんを大事にして、なんだつたら

今度会った時には結婚して子供もいるくらいになってないと私には勝てないと思うよ。

私に負けっぱなしで悔しいっていう気持ちがあるのなら、それくらい覚悟でいてよね。

そうじゃないと私も張り合いがないから。

でも…… možも、よ。

もしも万が一、今度会った時に私が一人だったとしても、それでも変わらずに声をかけてよ。

楽しく話そうよ。

私たちは友達なんだからさ、この前みたいに、すれ違っているのに話もしないなんて悲しいじゃない。

ありえない話だけど、

もし私がその時、彼氏がいなくて一人だったなら、それは私の準備が足りてないってだけだから。

ちよつと仕度が遅れているだけだから。

変に気を遣わなくていいからね。

その時は、しょうがないから

俺くと彼女さんを精一杯、

笑顔で祝福してあげるわよ。

でも、その裏で私は着々と

俺くんを負かす準備をしているって事を忘れないでよね。

だから、さ。

どっちにしても今度会う時には笑って会おうよ。

俺くんという時は、いつも楽しかったから。

これから、ずっと、そうでありたいな。

ワガママかな？

でも、もう勝負は申し込んだから。

一方的だけどね。

このメールは送った、って俺くんには知らせません。
大学時代のアドレスだから、

俺くんが見るのはずっと後になるかもしれないし、
もしかしたら見ないかもしれない。

最初に書いたのは、そういう意味です。

読んでほしいっていう気持ちもあるし、

どっちでもいいっていう気持ちもあります。

メールを書いたのは、

書く事で私の気持ちを整理したい、納得させたいっていうのが
一番大きな動機だから、こうして書いてしまった今となっては、
その目的は、ほとんど達成されている気がします。
だから、ホントにどっちでもいいんだ。

今度、会った時に

俺くんがメールを読んでいない風に見えたなら、

私も、そう振舞います。

そうなったら私の空回りだね。

それでもいいし。

でも、もし、これを読んだなら私の勝負を受けてよね。

それと、読んでから

何か言いたい事ができたら遠慮なく言ってきてね。

『俺たちのつきあい始めるのが遅くなったのは、

やっぱりお前のせいだー！』

っていうのもいいよ。

責任は取れないし、謝る事くらいしかできないけど、
何度でも謝るよ。

できれば彼女さんにも説明して、謝りたいな。

こういう事だったんですよって。

それに、今度は、ちゃんと彼女さんを紹介してほしい。
名前とか、趣味とか、どんな人なのか知りたいし。

俺くんの選んだ人なら、絶対、仲良くなれるって思うんだ。

長くなっちゃったけど、そろそろ終わります。

忙しいけど、お互い頑張ろう。

私も頑張るよ。

俺くんに甘えないですむようにね。

じゃあね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9787f/>

サークルの大学生と

2010年10月12日14時47分発行